

Charlotte～乙坂有宇と 9人の女神～

黒髪ワタル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

処女作です。Charlotteの乙坂有宇くんが主人公です。Charlotte、ラブライブ両方知っておかないと難しい部分もあると思いますが、とりあえず最初はラブライブのアニメの流れに沿っていくつもりなのでラブライブアニメを見てる人には一応わかると思います。キャラ崩壊、設定がズレてる部分あると思います。ごめんなさい。更新不定期ですが月1くらいでいけたらと思っています。一応設定的にはCharlotteはタイムリープ後、ラブライブは初期の設定となっております

【追記】 見にくかったので全話で多少の編集をしました。

目次

プロローグ	1
第1話 邂逅	15
第2話 転校	19
第3話 始動	40
第4話 初日	58
第5話 予感	80
第6話 朝練	106
第7話 疑問	125
第8話 予兆	146
第9話 訪問	175
第10話 真意	203
〔正月特別編〕新年	221

第1話 決意	249
第2話 羞恥	256

プロローグ

熊「…能力は……崩壊」

有「ほ、崩壊だ?!」

4月某日、いつものように友利から無理やり連れてこられ生徒会室に集合した僕達は協力者である全身ずぶ濡れ男からまた新しい能力者の場所と能力を教えて貰ったのだが…

有「まさかその能力が崩壊…だ?!」

友「歩未ちゃんと同じ能力…珍しいっすね、別の人間から同じ能力が芽生えるとは…」

熊「…少し……違う」

有「違う? 歩未とは別の能力ということなのか?」

頷く。濡れ男。

熊「あれは…精神が錯乱した時に起こる…今回は、絶望を感じた時…」

高「つまり…能力者が絶望を感じた時に崩壊の能力が発動する、ということですか？」

高城が話をまとめる。しかし…

有「絶望、か…面倒だな。」

絶望した時に発動するということは歩未と同じで自分で制御することができないということだ。そのうえ絶望なんて精神錯乱より起こる可能性はかなり高い。対象者が子供となればなおさらだ。

友「すぐに向かいましょう。早く能力者をこの学園に連れてこなくてはなりません。」

僕より少し早く同じ結論に至ったらしい友利がみんなに呼びかける。いつもならこ

こでため息の一つもつくところなのだが今回はとてもそういう気にはなれなかった。

* * *

友「地図によるとここっすね」

バスと電車を使うこと一時間、たどり着いたのは神田にある古びた学校だった。近くに秋葉原があるとは思えないほど静かな環境で、聞こえてくるのは部活の生徒らしい掛け声のみだ。

有「ここに崩壊の能力者が…？」

友「とにかく聞き込みを始めましょう。崩壊の能力なら歩未ちゃんと同じように何かしらの関連した夢を見てる可能性が高いです」

そういつて聞き込みを始める友利。僕も参加しようと思ったのだが、よく考えたら初対面の人間に「昨日なんか夢見た？」とかどうやって聞けばいいんだ？しかもよく周りを見渡して見ると女子しか歩いていない。どうやらここは女子高のようだ。

……女子相手に前日の夢についての聞き込み……間違いなく変質者だ。聞き込みどころかお巡りさんに事情聴取されかねないレベル。

やってられるか……とまわりを見渡すと案外三人ともうまく聞き込みができているらしい。友利や黒羽はともかく高城はどうしてるんだ……？

参考になるかもしれないので聞き耳をたてることにした。

高「お待ちなさいそのさまよえる少女よ……」

……？

女生徒「な、なんですか……？」

高「そなたからは水難の相がでて……おそらく昨夜は川や海で溺れる夢を見たの

ではないか……？」

…!?

女生徒「い、いやそんな夢見てないですけど…」

高「ふむ…それでは尋ねよう。そなたは昨夜はどのような夢を見た？おそらくそれがそなたの未来であろう…。」

女生徒「あたし昨日はまず夢を見てませんけど…。あ、あの私ちよつと急いであるので失礼します!!」

有「……。」

……宗教の勧誘だった。…うん、あれはないな。あんなことしてたら事情聴取どころか一足飛ばして実刑を受けるまでである。僕は隅の方でおとなしく待つてよう…と思

たまたま近くにあった大きな木の下に腰掛けているとどこからともなく歩未に散々聴かされたハロハロの音楽とともに「…ほっ！ほっ！」という謎の掛け声が聴こえてきた。

有「…………？」

気になって音をたどってみる。どうやら音源は校舎裏にあったラジカセらしい。掛け声はそれにあわせて踊る一人の少女からでていた。ダンス部かなにかだろうか…？気になったので木の影に隠れて真剣な少女の横顔を盗み見てみる。

有「…………！」

僕はそれを見て思わず息を呑む。驚くほどの美少女だった。オレンジ色がかかった明るい茶髪をサイドポニーテールしてある。青色の瞳には真剣な光を帯びておりただひたすら踊ることに集中していた。

…正直ダンスは完璧とは程遠い。早かったり遅かったりでリズムと全然合っていないし、ダンスの型自体もしっかり伸ばせきれてなかったりしている。しかし…

有「綺麗だ：」

拙いダンス。幼稚な動き。でもそれを真剣な表情で取り組み続ける少女の姿はどうしようもなく綺麗で、僕は不覚にも見とれてしまっていた。少女はこちらに気づくことなく練習を続けていたが、ターンの途中で転んでしまい、腰を強く打ち付けてしまった。穂「アイタタタタ：くう。ハロハロのダンスって案外難しいんだねえー。」

少女は腰をさすりながら呟く。すると後ろから2人の生徒らしき人物が少女に近づいていた。1人は少し青みがかかっているが見事な黒髪ロングの美少女で弓道着を身にまとっている。もう1人は灰色：？白髪に近い髪色だろうか。髪型は頭の上にトサカのようなものがありかなり特徴的だがこちらもかなりの美少女だ。黒髪ロングの少女が倒れた少女に話しかける。

海「ひとりでも意味がありませんよ？」

少女が顔をあげる。大和撫子さんはその少女に手を差し伸べながら続けた。

海「やるなら、三人でやらないと！」

倒れていた少女はばあつと顔を輝かせるとその少女の手をとることなく飛びついた。

穂「うゝみゝゝちやあゝゝん!!!」

少女が泣きそうなくらいの勢いで叫びながら抱きつく。うみと呼ばれた少女は仕方無いですねと眩き背中をさすっているが顔はなんだかんだで嬉しそうだ。

こ「じゃあこれからどうする？」

友情ドラマが一段落したところでさつきまでニコニコと静かに見守っていた少女が切り替えるように話しかける。あの表情を見る限りあのような光景はわりと日常のことのようだ。

穂「うーん…じゃあとりあえず一旦帰って穂乃果の家で他のスクールアイドルについて調べてみようよ！」

サイドポニーテールの少女もケロツとした顔で提案する。すると黒髪の少女が困っ

たような顔をしはじめた。それに気づいたららしい少女が黒髪の少女に話しかける。

こ「海未ちゃん? どうかしたの?」

海「あー…いえ、今はあまり家に帰らない方がいいかと思うのですが…」

穂「? 何かあつたの?」

サイドポニーの子も少女の表情が苦いことに気づいたのか上がりまくっていたテンシオンを少し落ち着かせる。

海「いえ…何かあつたという訳では無いのですが…どうやら今校門のところに宗教の勧誘のような人達がいらっしやるようで…何でも通る生徒達に昨日どんな夢を見たかと聞いて回っているらしいのです…。」

有「ぶっ!?!」

穂・こ・海「「?」」

思わず吹き出してしまった…。木の影にサツと隠れる。ネコか何かかと思われたのだろうか、幸い少女達はこちらに来ることなく話を続けていた。…つていうか思いつきり噂になってるじゃねえか!?!しかも宗教の勧誘と思われるし…(絶対高城のせいだ)。これはさっさと能力者見つけて退散した方が良さそうだと、僕も仕事に戻ろうと踵

を返そうとしたその時、サイドポニーテールの少女のよく通る声が入った。

穂「そーいえば2人は昨日はどんな夢を見たの？」

すると黒髪少女がからかうような声音で返す。

海「ふふっ。ほのかも宗教の勧誘ですか？」

穂「ち、違うよ。なんとなく気になっただけだもん！」

……話の流れ的にこのまま彼女達は昨夜の夢について話すだろう。どーせ帰ったつて女生徒に話とか聞けるわけがないしこのまま少女達の話聞くべきか。木の影にまた潜む。

こ「ふふ。穂乃果ちゃんらしいね♪ことりは昨日はチーズケーキに囲まれて食べ続ける夢を見たよ♪ああー…美味しかったなあ〜。」

トサカの少女はうっとりしたように顔を赤らめるとそのまま動かなくなってしまった。どうやら夢世界に旅だってしまったらしい。

海「ことり…この前も似たような夢を見たと言ってませんでしたか…?」

黒髪少女が呆れたように言うのとトサカの少女は「この前はマカロンだよ！」と強く反論する。

穂「あ、あはは…。海未ちゃんは？」

さすがのサイドポニーの少女も苦笑しながら話を流す。

海「そうですね…。昨日は静かな夜でしたから…。特に夢は見ませんでした。」

：どうやら2人は特におかしな夢は見えてない(?) ようだ。まああれだけ探していた人物がたまたまいるわけが無いよな。最後の1人の話を聞いたらおとなしく戻るとしよう。少女達に目をやるとちようどトサカの少女がサイドポニー少女と同じ質問をしているところだった。

こ「それで？穂乃果ちゃんはどんな夢を見たの？」

穂「穂乃果？うゝゝん。穂乃果はねえゝゝゝうゝん。」

珍しく歯切れの悪いサイドポニーの少女。

海「もしかして夢を見た気はするけど、どんな夢だったかを覚えていない、ということですか？」

あー。あるある…あれなーんか気になっちゃうんだよな。そのくせまず間違いないし思い出せないし。僕は木の影でウンウン頷く。しかしサイドポニー少女が続けたのは全く別の言葉であり、探し続けた言葉だった。

穂「んー？いや、どんな夢だったかは覚えてるんだけどさ。なんかよくわからない夢だったんだよー。なんか地面？みたいなものが急にガガガーツて開いてガラガラーって崩れちゃうの！それだけ。」

…!!?

海「穂乃果…もしかしてどこか悪いんじや…」

穂「そ、そんなこと無いよー！でもこのごろその夢ばかり見るんだよねえ…」

…同じだ。地面のようなものが崩壊する夢。似たような夢をよく見る。歩未の時と…。…つまりもし、もし仮に、彼女が今何かに絶望してしまえば。地面はあっけなく崩壊し、あのひまわりのように明るい少女は親友を巻き込んで——死ぬ。

…：友利を…呼ばないと。僕は震える足に鞭打ってみんながいるはずの校門に向かった。

* * *

友「ちよつとー？サボって何してたんすかー？いくら女子に縁がないからつてあんま見てると通報されますよ？」

トボトボと歩いて帰ってきた僕に友利は最初こそからかうようにそう言ったが、僕の表情を見るとすぐに真剣な顔つきになり

友「…何かあったんですか？」

と聞いてきた。他のところに聞き込みをしていた2人も僕らの様子を見て近づいて

くる。

有「能力者がいた。校舎裏だ。今は友達と談笑中で逃亡の心配はない。ハロハロの動画を見ていたからもしかしたら黒羽がいた方が都合がいいかもしれない。」

僕の感情のない報告を受けた友利は先程より緊張の色を濃くした顔で頷いた。

友「：わかりました。それでは黒羽さんと私で交渉に向かいます。高城は乙坂さんを連れて戻ってください。」

柄にも無く僕の心配でもしたのか、そんな提案をしてくる友利。だが、その命令だけは聞けなかった。

有「いや、僕も行く。」

友「そんな今にも死にそうな顔して何言ってるんですか…?」

友利は今度は心配というより呆れたような顔を向けてくるが、それに構うことなく続ける。

有「崩壊の能力者の家族として、崩壊の危険性や家族の気持ちをわかってもらえらるよう説明をしたい。」

なんでこんなことを言ったのかはわからない。家族としての説明なんて絶対にしたくない。僕にとってあれは思い出したくもない記憶のひとつだ。

でも、このままあの少女と2度と会わないかもしれないというのはどうしても嫌だった。友利は僕の顔をしばらく見つめるとはーっと大きなため息をついた。

友「……わかりました。それならみんなで行きましょう。ただし相手は絶望が条件の能力者です。刺激するようなことは絶対に言わないでください。」

そういつて歩き出した友利に高城、黒羽がいつもより緊張した様子で歩いていく。僕はそれぞれの横顔を見ながら3人を追うように歩いた。あの太陽のような少女から、今まで築いてきたすべての環境を奪うために。

第1話 邂逅

穂「…嫌です。私はこの学校を離れたくありません。」

意外にもしつかりとした丁寧な言葉遣い。しかしそこから出た言葉は僕達の要請——つまり、あなたには能力が芽生えてしまっていて、このままでは研究者達から実験材料として捕まる可能性が高いので、この学校を転校し、その能力が消えるまでの青春時代を研究者達から隠れることが出来る自分たちの学校に来てほしい——という話だ。を、ハッキリと拒絶した。

その言葉を一番間近で聞いた友利の表情に驚きはない。ある程度予想していたのだろう。…当然だ。僕だつて予想できていたようなことなのだから。

あんなに明るく友達と話していた少女。あんなに真剣にダンスに取り組んでいた少女。聞けば、この学校は今重大な危機に立たされていて、もしこの1年で生徒を集められなければ廃校してしまうらしい。なぜそれでダンスをしていたのかはよくわからないが、きつと彼女なりに考えて出した結論なのだろう。あの表情を見ればわかる。

そんな女の子が、親友を、学校を放つて自分だけ他のところへ行けるはずがない。し

かし、残念ながら僕らはそれを許すわけにはいかなかった。

友「あなたにも事情があることは理解しています。ですが、もしあなたが捕まってしまったらその結果被害を被るのはあなただけです。：例えば、妹さんがいらつしやいますよね？」

少女がビクンと肩を震わせる。どうやら本当らしい。どうやって調べたんだ…。

友「姉妹、兄弟で片方が能力者の場合、もう片方にも能力が目覚める可能性は高い。研究者は間違いなくあなたの妹さんも捕らえるでしょう。」

自身の過去を思い出したのかそこで声は途切れてしまう。しかし友利は気丈にも少女から目をそらすことなく続けた。

友「…：それでもあなたはここにいたいのですか？」

先程より優しく、だからこそ辛い問いかけ。少女は一瞬だけ悔しそうに目を伏せた。

しかし上がってきた顔には固い決意の色が浮かんでいた。少女は友利の目を真っ直ぐ見つめながら言った。

穂「でも！それなら私はその能力を使わなければいけません！だいたい私にどんな能力があるの!?!私にはあなた達みたいな特殊な力はないよ!?!」

段々と追い詰められていることに焦りを感じているのか、声を荒げ、叫ぶように言う

少女。

……限界だな。僕は少女に一歩近づく。できれば彼女に自身の能力を伝えたくはなかつた。ヘタに刺激を与えるのがマズイというのもあるが、見たくなかつたのだ。彼女が悲しむ姿を。

あんなに明るく笑顔を振りまいていた少女の泣き顔を見たくなかつた。自分があの子を泣かせてしまうのがたまらなく嫌だつた。……だがこれ以上隠し続けても意味はない。僕は腹に大きく息を吸い、彼女に最悪の真実を告げた。

有「……君の能力は、崩壊。特徴は君自身の意志とは関係なく君が絶望した時に周りの物をすべて破壊する。どのくらいのかはわからないが……同じ能力を持っていた僕の妹は数人の生徒を巻き込んで校舎を半壊させたよ……。」

穂「そ、そんな……っ！」

僕の話聞いた少女は唇を強く噛んで深く俯いた。キレイな色をした目に涙が貯まっていく。きつと大好きだから、わかってしまったんだろう。自分の能力がどういふものなのかを。もしかしたら大切な友人や、大好きな校舎を深く傷つけてしまうかもしれないということ。

友「……もう一度聞きます。それでもあなたはここにいたいのですか？」

友利が再度問いかける。少女は俯いた姿勢のまま動かない。その姿は僕の心をまた

どうしようもなく揺さぶるのだった。彼女もわかつてはいるのだ。この状況がどうしようもないことを。彼女は迫り来る廃校の危機に何もできず、ただ僕達と安全と保身のために過ごすしかない。この状況でなぜ能力が発動しないのか不思議なくらいだ。彼女は深く俯いたままで表情が見えない。

…何も答えず地面の1点を見続ける彼女は一体何を考えているのだろうか。

この状況にただ子供のように駄々をこねているのか、それとも——この状況になつてもなお希望を探し続けているのか——

有「……なあ友利。」

——そう考えた時、

有「…僕の能力で彼女の能力を奪つちやダメか？」

僕の口は勝手に動いていた…。

第2話 転校

一瞬、周りが静まり返った。僕はもちろん、友利や穂乃果という少女、高城や黒羽も何も言わない。学園の部活動の掛け声すらずっと遠くで聞こえた気がした。……その静寂を破ったのは二人同時だった。

穂・友「ダメだよ（です）」

…正直驚いた。反対されたことはない。元々僕的能力を知っていて、それでいてこの案を出さなかった友利は賛成するはずがないことくらいはわかっていた。その理由には知らんが。しかし、まさか本人にも反対されるとは…。思わずまじまじと見つめると、少女は恥ずかしそうに身をよじった。

穂「…いい、いや、そりゃあ気持ちには嬉しいけど…でもあなたに迷惑かけちゃうし、それ……。」

そこで少女は黙ってしまった。が、言いたいことはなんとなくわかった。おおかた（そんな危険な能力を他人に背負わせてはいけない）とでも思っているんだろう。

全くこんな状況で人の心配がでいいのかよ……。つくづく善人の考えは理解出来ない。が、そう悪いもんじゃないな、と思える自分がいた。

有「その心配はいらない。いやまあいらないうわけじゃないが……。…さつき話した妹の能力も僕が奪った。つまり僕にはすでに崩壊の能力が備わっているんだ。だから今更一つや二つ増えても大きな問題は無い。」

実際には能力を抑えるための条件が増えるが今わざわざ説明する必要はないだろう。絶望するほど打ち込んでる何かとかなしい。歩未に何か起こったりしない限りは今までと変わらないはずだ。

穂「でも……」

なおも迷うような素振りをしながら何か言おうとする少女を僕は手で制し、ゆっくりと首を振った。

有「いいんだ。そもそも実際的なリスクがないというならそこから先は僕の気持ちの問題だ。君が何かを思ったり言う必要はない。その能力を必要とするなら別だけども……」

僕がそう言い切ると少女は不承不承といった顔で一步下がった。それを横目に僕は友利に向き直って言う。

有「これを踏まえた上で聞くぞ？友利、この状況で僕の提案を却下とする理由はなんだ？」

我ながら中々いい提案だと思う。デメリットはほとんどないし、双方の要望を聞き入れている。だからなぜ友利が反対するのか僕にはよくわからなかった。

友「……っ」

友利は俯きしばらく固まっていたが、やがて珍しくボソボソといった形で話し始め

る。

友「……………らです」

有「あん？何だつて？」

小さくてよく聞こえなかったので聞き返すと友利はキツと僕を睨み付けるように顔を上げると叫ぶように言った。

友「あまり能力を奪いすぎると、あなたの脳に深刻なダメージがいきかねないからです!!」

……。

有「……………は？」

……思わずたっぷり数秒も惚けてしまった。……つまり、なんだ？

有「お前も僕の心配をしてくれてた…のか？」

友「うっさいバーカ！」

僕が思わず口に出してしまった言葉に友利はそれだけ言うと言った僕から思いつき顔を

背けてしまった。

…まずい。ダメだとわかってても顔がニヤけてしまう。まさかコイツが僕のことを心配する日が来るなんて…。僕は顔をできるだけ厳格に見えそうな形に戻してから言った。

有「そ、そうか。それはありがたいがそういうことなら返す言葉は同じだ。僕が良いと言っていることにお前が口を出す必要は——友「あの子とは事情が違います」——。」

少女をいなしした時と同じように言いくるめようとした僕のセリフを友利は途中で遮った。僕の方に向きなおるとそのまま続ける。

友「同じ能力を持っているからもう一つ持ってもリスクが変わらない——それにも言いたいことはいくつかありますがまあそれはいいでしょう。ですがこれは違います。私が出ているのは崩壊という能力自体のリスクではなく、あなたが能力を増やすことに対するリスクの話をしているんです。」

有「…何だって？能力を増やすことに対するリスク？そんなものがあるのか？」

友「当然でしょう。基本的に能力者は一人ひとつの能力を持っています。それに対して理由はわかりませんがあなたは二つの能力を持っている。そのうえ片方の能力で他人の能力を奪い続けているんです。…おそらく脳の負担はハンパないでしょう。いつか記憶力に深刻な問題が生じる…それどころか兄のように言葉も話せなくなってしまう可能性すらあります。」

静かにそう告げてくる友利に僕はなにか言い返さなくては、と考えていた。しかし記憶を、言葉を失うかもしれないという恐怖が僕から思考力を奪う。僕は忍び寄ってくる恐怖を振り払うように、そもそもなぜ僕がこんなに必死になっているんだろう？という単純な疑問すら考えられずただやけっぱちのように叫んだ。

有「……っ！そ、それでもだ！例えそうだったとしても僕が良いと言っていることにほかの誰にも口を出す権利はない！」

———そう言い切った時、今まで冷静に話していた友利が大きく表情を歪める。彼女はそのまま機嫌さを隠そうともせずつかつかと音をたてて歩み寄り、その細腕のどこにという力で僕の胸ぐらをつかみあげて叫んだ。

友「ホントにそう思ってるんすか!?あなたに危険が及ぶことが誰にも関係はないと!?」

その目は今まで見たこともないほど真剣な光を帯びていて、僕は思わず目をそらしてしまった。そのまま途切れ途切れの声を出す。

有「そ、そうだ！お前達には関係ないことだろ！」

友「ふっぎけんな!!!」

友利は胸ぐらをつかんだ手を強く引き、無理やり僕を自分の方に向かせる。彼女の綺麗な瞳は僕を射抜くように睨み続けていた。

友「もしあなたの記憶がなくなってしまったら！言葉を話せなくなったら！周りがどう思うか想像もできねえのかよ!? 歩未ちゃんは!? 歩未ちゃんは兄が死ぬかもしれないとわかっててそれを許すと思いますか!? だいたい、ここまで話を聞いた彼女があなたに能力を奪われることを許すとも!?!? ……っ!」

その言葉を最後に叩きつけるように僕に怒りをぶつけ続けていた友利の声が一瞬途

切れ、胸ぐらをつかんでいた手の力が緩む。顔を上げると友利の顔からさつきまでの怒りの形相が消えていて、代わりに浮かんでいたのは子供のような半泣きの表情だった。

友「あなたに何か起こった時、私達が、何も思わないと、本当に思うんですか……?!」

周りを見渡すと高城や黒羽も真剣な表情でじつと僕を見つめていた。

有「……分かったよ。僕の言い方が悪かった。」

僕は力なくそう言うしかなかった。つかまれていた腕が下ろされ、友利が離れる。同時に溜まっていた緊張が解け、一気に体に疲れが押し寄せて来る。同

……正直さつき言ったことの半分は、本音、と言って問題ないようなものだった。僕にもなぜ自分がそこまでしているのかはわからない。なんとなく、としか言いようがない。しかし、ここで少女を見捨てる、と後で絶対後悔する、そんな気がしたのだ。

でも、僕にはもうこの状況を変えるだけの力を持ったカードはない——。友利の言っていることは理になつていない、希望の状況でのメリット、デメリットを提示し、その上で自らの正当性を伝えてくる。もう僕には彼女を言いくるめることは不可能だった。

——その時、誰もが守っていた静寂を破つたのは、言い負かされた僕ではもちろんなく、改めて説得にかかろうとした友利でもなかった。

穂「……あのっ！」

よく通るその声には緊張や恐れの色こそあれ、絶望は全く感じられなかった。

友「……なんです？この状況でまだ何かあるんすか？」

友利は驚きを隠せなかったのか、一瞬だけ目を丸くしたがすぐに無表情に戻るとそう言った。

少女は友利に気圧されたように一瞬だけ視線を地面に向けたが、すぐに顔をあげて言った。

穂「……あなた達の話はよくわかったよ。ごもつともだし、正しいと思う。でも！そ

れでも私は諦めたくない!!絶対に絶望なんてしない!!この学校は廃校になんかさせない!!!だから……」

彼女はここで1度言葉を区切り、僕達一人ひとりの目を見つめた後、学園中に響き渡る大声で叫んだ。

穂「……だから私はここから離れるわけには行かないの!!!!」

一瞬、よりもはるかに長い時間。誰もが言葉を失った。先程まで完全に場を支配していた友利すら何も言わない。いや、言えなかつた。∴友利は完全に正しかつた。誰もが理解できる理になつた説明をし、場を支配した。おそらく、誰がどんな理屈を持つてきても彼女はたやすく論破しただろう。

だが少女は、すべての理を捨て、ただやりたいからと、自分がやるんだと感情のままに叫んだ。

有「くっ……くははは……」

思わず笑いが漏れてしまう。まさかこんな簡単な方法があつたとはな……。だが、この流れに乗らない手はない。僕はどうか笑いを静めると友利に言った。

有「聞いてのとおりだ友利。どうやらこの子は向こうに行く気が全くないらしい。やはりここは僕が能力を奪うべきだろう。」

相手にまったく譲る気がないのならこちらから折れるしかない。そしてこの場合の折れ方はどう考えても僕が能力を奪うことだろう。

友利はしばらく黙って僕の顔を見つめていたが、やがて何か当たるように長い溜息を吐くとヤケクソ気味にそう言った。

友「……はぁーっ！わかりましたよ！高坂さんがここに残ることを認めましょう！」

穂「ほ、ホントに!?あ、でも……」

少女はそう言つて喜びから一転、困つたように僕の方をチラチラと見てくる。おそろくさつきの話を気になっているんだろう。

有「まあそつちは気にするな。まさかいきなり記憶がなくなつたりはしないだろ。何か異変が起きない限りは気にしなくていいはずだ」

とりあえずそう言ってみたものの少女は納得していないようだった。困惑気味に僕と友利の間で目を動かす。このままだと話が進みにそうにない。少女を言いくるめるためにさらに口を動かそうとした僕をまたしても友利が遮った。

友「待つてください。私は高坂さんがここに残るのを認めただけで、あなたが彼女の能力を奪っていいとは一言も言っていないよ？」

有「……は？」

一瞬また惚けてしまった。何を言ってるんだコイツは？

有「つまり能力を残したままここに残すってことか?…正気か?」

友「はい。高坂さんは1年間限定でこの学園に通う事を認めます。もちろん監視は付けさせていただきますが。」

……監視だと?

有「…でもこの能力には監視なんかつけても意味無いんじゃないか?」

基本能力者が能力を使わないように見張るのが監視の役割であり、無意識に起こってしまう崩壊に監視をつけても意味がない。そもそも、崩壊の能力が発動した時点でよほどの場所でない限りジ・エンドだ。しかし、友利は全く臆することなくこう続けた。

友「いるじゃないですか。崩壊が起きてもそれを抑えこみ、それどころか周りの人々を避難させることまで出来る人物が。」

有「……………」

崩壊を抑えこみ、周りの避難までさせられる人物。…そんなやついただろうか？不思議に思っただけを周りを見渡すと高城と黒羽、友利がじつとこちらを見つめていた。

有「……………え？僕？」

思わず呟いてしまった言葉に友利が大きく頷く。

友「ええ。あなたなら崩壊を念能力で抑え、その間に浮遊能力で周辺の人々の避難を済ませることもできるでしょう？」

有「……いやいやいや。ちよつと待て」

僕は慌てて言葉を繋ぐ。頭の中では嫌な予感サイレンが大きく鳴り響いていた。

有「ここ、女子高だぞ？そのうえ僕にはお前のように1人にすら姿を隠すことができない。ただ監視するだけならともかく、崩壊の能力を止めるまで四六時中近くにいるというのはどう考えても無理だ。」

多分やろうとしたら監視すらできない。それどころか管理人に1発で見つかって敷地内に入ることすらできないだろう。本当にお巡りさんのお世話になってしまう。し

かし、友利はそれすらもあらかじめ予想していたというように大きくうなずき話を続ける。

友「わかっています。だからあなたには堂々と彼女の横で監視をしてもらいます。」

有「……どうということだ？」

そこまで丁寧に言われてもまだ分からない僕に、友利はいつもの意地の悪い綺麗な笑顔で告げた。

友「だーかーらあー。彼女がうちの学院に来るんじゃないやなくて、あなたがこの学院に転校して1年間彼女の監視をしてください☆」

有「……………はい？」

今日何度目かの僕の間抜けな声は、あつという間に夕暮れの空に溶け込んでいった。

第3話 始動

「…………ふあゝあ。」

いつもより1時間ほど早い時間に目覚める。ようやく桜が咲いてきたばかりの春の朝は空気が冷たく、震えながら洗面所に向かう。

昨夜はあまり眠れなかったにも関わらず足どりはしっかりしていて頭もスッキリしていることに少し驚いた。

——これは新しく環境が変わることに不安を感じているのか、それとも——

そんな益体もない事を考えながら歯を磨く。僕は口をゆすぐためのコップに溜めた水を眺めながら昨日のことを思い出していた。

——有「…………おい、ちよつと待て、じゃあつまりお前は僕にこの学校に転

校して1年間彼女の監視兼護衛をやれって言うてるのか？」

突然の提案に驚きに震える僕に畳み掛けるように友利はにこやかに言い放つ。

友「はい！何か問題でも？」

……またいい笑顔で頷くなこいつは……。

有「いや……転校って……確かにそれができれば堂々と監視につけるが、そもそもここが女子校なことに変わりはないんだが……。」

男が転校させてくださいって言うても正式に断られるか警察に通報されるかの違い

でしかない。……いや結構重要だなそれ。僕の冷静な反論に友利は1度思案顔で頷くと急に表情を真剣なそれにして言った。

友「…女装すればいいんじゃないですか？」

有「するか!? シリアスとギャグパートを混同させるんじゃないやねえ!？」

またなんでさつきみたいな真剣な表情でそんなことが言えるんだよ!? やめろよなちよつと嬉しかったんだぞアレ!？」

友「冗談ですよ。あなたにはテスト生としてここに転校してもらいましょう。幸い廃校の危機にあるこの学院なら男子生徒を取り入れるため、という言い訳もできますしね。」

ニコリともせず、にそう言う友利。：お前が言う、と冗談に聞こえねえんだよ…。

有「……。」

友「どうしました？これなら誰もが要望を叶えていると思えますが？」

返事をせず黙り込む僕を不審に思ったのか、確認する様にこちらに問いかける友利。
いや、不満はないんだけど……。

僕はなおも数秒黙っていたが、諦めて話すことにした。もう今更だしな。

有「……歩未が心配なんだよ」

友「……シスコンですねぇ。」

有「ほっとけ」

そうと分かっているにしても口調が投げやりになることだけは止められなかった。反応も予想通りだしな。でもコレばかりはどうしようもない。歩未は1度とても危険な目に遭っているし、前の世界ではそれが原因で歩未をなくしてしまった。僕は同じ思いをもう2度としたいくないし、するわけにはいかない。確かに今でも中学と高校は別だが、僕がもしこの学院に転校すれば少なくとも学校にいる間はかなり遠くに離れてしまう。シスコンなんだと言われようとそれだけは嫌だった。

友「……わかりました。それでは学校にいるあいだ歩未ちゃんは私が責任を持って面倒をみます。それでも信用出来ないのならここの近くの中学への転校を許可しましょう。」

有「……いいのか？」

友「…私も歩未ちゃんのごことは心配ですし。転校の方はそもそも歩未ちゃんはあなたに能力を奪われていて能力が発動する心配はないので特に問題はないっしょ。」

有「……そうか。ありがとう。でもやっぱりあいつはあつちに残しておこう。せつかく出来た学校の友達とムリヤリ離すのも可哀想だしな。……それに…」

友「？。それに、なんですか？」

途中で途切れた言葉を訝しむように顔を覗いてくる友利に僕は「いや、何でも。」と顔

を背けてしまう。

……それに、お前に任せた方が僕が見ているより安心だしな。

それほど気になることでもなかったのか、僕が顔を背けると友利は「そーですか。」と言って、あっさりと僕から離れた。

友「では、いいんですね？」

有「ああ。不本意だけでしょうがない。1年間の護衛と監視、引き受ける。」

僕は友利にそう答えると、少し離れた位置で疑問符を浮かべたままの少女に向き直ると手を伸ばして言った。

有「…そんなわけで、乙坂有宇だ。」

少女は相変わらず状況が呑み込めていないようだったが、やがておずおずと僕の手を握る。

穂「わ、私…高坂穂乃果。」

有「高坂か。よろしく。」

僕がそう言って笑いかけると、ようやく彼女も笑顔を見せてくれた。

穂「…うん！よろしくね！」

初めて正面から見た彼女の笑顔は、やっぱり太陽のように眩しかった

* * * *

歩「有宇お兄ちゃん？早く来てご飯を一緒に食べようなのです〜！」

リビングから聞こえてきた歩未の呼ぶ声にハツとなる。どうやらかなり長いこと回想していたらしい。時計を見ると結構な時間が経っていた。歯磨きを終え早歩きでリビングに向かうと歩未がドアの前で少しだけ怒ったような顔をして迎える。

歩「もお有宇お兄ちゃん？お友達を待たせておいて中々起きてこないなんていけないのです〜！」

有「あん？友達？」

もちろん呼んでない。不審に思っただけで歩未をどかして奥を覗き込むと全く友達などと

は程遠いメガネがイスに座って勝手にお茶を飲んでいた。

有「テメエ高城なにしに来やがった？」

高「おはようございます乙坂さん。いやあそれにしても妹さんはお茶が入れるのがとてもお上手ですね。」

顔を見るなりいきなりケンカごしの僕を全く意に返さずお茶を飲みながらそんなことを言ういけ好かないメガネ…でなく高城は会って数秒でいきなりげんなりし始めた僕の顔が見えていないかのようにそのまま続ける。

高「もちろん転校してしまった親友である乙坂さんにご挨拶に来たのですよ？」

有「…あー、ハイハイ親友な。オツケーわかった。で、ホントは何しに来たんだ？俺の親友は何の用もなくいきなり人の家に押しかけるようなやつじゃないだろう？」

めんどくさかったのでノツてやることにした。

高「ははは、さすがですね乙坂さん。……お茶もう一杯頂けますか？」

僕でなく、歩未に向かってそう言う高城。いきなり話かけられた歩未は一瞬固まったがすぐに笑顔になると。

歩「はいなのです〜！ ついでにもう一人分の朝食も用意するので少々お待ちくださいなのでござるー！」

と言うと、とてとて台所へ戻っていった。

高「そこまで気をつかってくださなくても…。」

と、ぬけぬけと苦笑する高城に僕まで笑ってしまう。

有「よく言うぜ。このためにわざわざこんな時間に押し掛けて来たんだろう。」

そう。このタイミングで僕と2人で話すために。

有「で、本当に何の用だ高城。」

ドカつと高城の前に腰をおろしながら聞くとようやく高城はメガネを少しあげ真剣な表情をして僕に向き直った。

高「…もちろん、昨日の話を乙坂さんがどこまで理解していらっしやるかを確認しに来たんです。」

やつと本題に入ったか……つてか、え？

有「理解？確認？何のことだ？」

話の意味がわからない僕は聞こえたままにオウム返しをする。すると高城はなんとも言えないような微妙な表情を見せて再び話し始めた。

高「乙坂さん……友利さんがあなたを高坂さんの監視に選んだ理由……わかりますか？」

有「そりゃあ……僕なら万が一崩壊が起こっても止めることが出来るから、だろ？」

昨日友利自身そう言っていた。が、僕がそう答えると高城は今度こそ完全に呆れた表情で僕を見つめ、物わがりの悪い子供に説明するように話し始めた。

高「……いいですか？乙坂さん。あなたがこれから転校するのは能力者の集まりでもないければ秘密裏に建てられた高校でもない、普通の学校です。もし崩壊しそうになった学院とそれを防いだヒーローのような話が学院の外に漏れたら最後、2人揃って一生研究者達のモルモットですよ。」

有「……。でも……したら友利は一体僕に何をやれってんだ？」

まさかモルモットやれつてわけじゃないだろうし。

高「友利さんがわざわざ口に出さなかったのを私が話すというのはあまりいい気はしません。……よく考えてください乙坂さん。私達は絶対に目立った解決方法に頼るわけにはいかない、事を大きくはできないんです。つまりもちろん崩壊を起こすわけにもいかない、だからこそ友利さんはあなたを派遣したんです。……もうおわかりですよ？」

有「……まさか、僕に高坂の能力を奪えつて言うのか？……でもお前達はそれに反対していたんじゃないのか？」

そこまで言われてようやくそこにたどり着いた僕に高城は満足そうに頷く。

高「もちろん、いざという時はという話です。彼女が絶望せずに1年間終えることが最善の方法には変わりありません。ですが、もし崩壊が起こりそうになったとき、あなたが使うべき能力は浮遊でも、念動力でもなく、略奪です。実は脳への負担については私も友利さんもあなたと考えは同じです。まさかいきなり記憶に障害が出てくるとは思いませんし、あなたがそこまでの覚悟をもつて臨むというのならとめる権利などありません。」

高「……わかりましたか？つまりあなたはこれから1年間あなたがすることは彼女の護衛でなく監視でもなく——」

ここで高城は1拍おいて続けた。少しだけ寂しそうな笑顔を浮かべながら。

高「——最悪の悲劇を避けるためのストッパーとして彼女の側にいてあげてください」

い。」

有「…………ふう。」

秋葉原の駅を降りて神田へ向かう。目の前がきらびやかなチカチカした町並みから昔ながらのという住宅街が広がっていく。歩いていくうちにだんだんと街の喧騒が遠ざかるのを感じながら僕は今朝話した（結局朝飯も僕の家で食べていきやがった）高城の話の思い出していた。

監視ではなく、ストッパーとして、か……。正直、どっちの解決でも特に問題ないんじゃないかと思う。崩壊が起こった瞬間に僕が念動力を発動させてしまえば大きく広がることなく事を止められる。奴らの耳に入るほど大事になるとは思えないのだ。

…まあこれは研究者達を知らないからこそその樂觀的思考なんだろうな。

高城の表情はそんなことになってしまえば間違いなく僕達2人は研究者に捕まると語っていた。それどころかあいつからは、できれば略奪すら使わないで一年が過ぎてほ

しいという念がありありと感じられた。

それは多分研究者達うんぬんの話より略奪による僕の脳への負担を考慮してのことだろう。あいつはあくまで1年間崩壊を起こさずに過ごすとということに賭けているようだった。∴そしてそれは、きつと友利も。

……ふん。まああいつらには僕がいけない間歩末の面倒をみてもらうことになってるしそうでなくとも元々多少の恩はある。ここらで返しておくのも悪くない。

有「……ここか」

僕は校門にたどり着くとこれから1年世話になる校舎を見上げた。古いながらも趣きのある校舎とすでに満開となっている何本もの桜は、新しい転校生を迎えてくれてい

るような気がした。

有「…さて。じゃあまずはあいつの友達になることから始めるか。」

——— 今から思えばここが全ての始まりだったと思う。僕は校門をくぐり、動き出した。彼女を崩壊から守ったり、その前に能力を奪って止めるのではなく、彼女に崩壊を起こすような絶望を与えないようにするために———

第4話 初日

？「私は反対です！学院に男子のテスト生を転入させるなんて!!」

———？朝一番に理事長室に行つて挨拶を済ませてきてください？———

そう書いてあつたのは今朝高城が置いていった3枚の手紙の中の1つである。高城によると、

高「昨日友利さんから預かってきました。それぞれ表にいつあけるべきか書いてあるので、その時が来たらあけて読め、だそうです。」

と、いうことらしい。なんでそんなバトル漫画の修行書みたいな扱いなのかはよくわからない。

いつその場で全部あけてしまおうかとも思ったが、友利の性格と能力を考えると常に近くに見張つていてもおかしくない。僕は大人しく命令に従うことにしてその手紙をもって学校へ向かい、？校門をくぐつたらあけること？と書いてあつた手紙の中

身を確認してココ理事長室の前まで来たわけだが……。

有「……どうやら先客がいるらしいな。」

しかもこちらにとつてあまり友好的ではなさそうな発言。どうやら今は入らない方が良さそうだ。僕は大人しく扉の前で待つことにした。その間にも中の話は進む。

？「答えてください理事長！」

まるで詰問するような声。どうやら理事長に何者かが抗議しているらしい。その声からは焦燥感がありありと感じられた。

理事「落ち着いてください綾瀬さん。」

なだめるように、しかしキツパリとした口調。そこからは役職にふさわしい威厳が漂っていた。たまらず生徒も口を塞ぐ。

しかし、残念ながら他のことで一気に頭がいっぱいになってしまった僕にはあまりそれを感ずることができなかつた。

…いや、だつてさ、理事長いくらなんでも声若すぎだろ!?明らかに女性だし20代かつてくらいキレイな声だぞ!?つか理事長つてハゲジジイ以外でもなれんのかよ知ら

んかったわ!!!

…などとアホらしい思考を続ける間にも会話は続く。

理事「そもそもあなたはなぜ今回のテスト生について反対するのですか？音ノ木坂が廃校になってしまうのを阻止したいと考えてるあなたにとつても共学にすることで少しでも生徒の数を増やそうとするのは悪くない話だと思うのですが。」

確かにそうだ。むしろ生徒を増やすためということを考えてとかなり正しい判断だと言える。…まあこのテスト生に限ればただ友利が無理やり僕をここにぶつ込むための口実を作っただけだが。もし反対意見があるとすれば…。

僕がそこまで考えたところで同じ結論に達したらしい理事長が綾瀬という女生徒に問いかける。

理事「…それともあなたは女子高のままの学院でありたいということですか？」

…まあそれだろうな。女生徒も予想していた質問だったのか間髪を入れることなく答える。

絵「いいえ、違います。そもそも私は共学化については基本的に賛成です。」

……。

いや賛成なのかよ!?じゃあ逆に何が気に食わないんだコイツ……?恐らく僕と同じ疑問を抱いているであろう理事長に構うことなく女生徒は話を続ける。

絵「私が今問題にしているのは共学化ではなくテスト生の生徒についてです。実は先ほどとある筋からコレを見せて頂いたのですが……」

すると中からカサカサという音がしてきた。恐らく何らかの資料を理事長に見せているんだろう。

絵「乙坂有宇。日本の中でもトップクラスの名門である陽野森高校を入試成績トップで入学。しかし……その後わずか1週間で学校を退学、そしていきなり記載された住所から離れたウチへのテスト生としての転入……」

彼女はそこで言葉を一区切りすると高らかに言い放った。

絵「……どう考えても怪しいじゃないですか!」

……僕は扉の前で思わず立ち尽くしてしまふ。……いや、うん。確かにソイツは怪しい

けどさ。何その住所まで書かれた細かい資料。僕書いてないんだけど？なんだよとある筋つて。怖いよ。

思わぬ方向からの抗議に理事長も一瞬言葉につまっていたが、すぐに冷静さを取り戻したのか先ほどと同じ落ち着いた声で話し始める。

理事「…あなたの言っていることも分からなくはありません。でも、私達学校側はしっかりと乙坂有宇君の人格や素行を審査した上でテスト生として彼を選んでいきます。そこにあなたが口を出す権利はない…。それに会ったこともない人物を経歴だけで判断するのは生徒会長として正しい行為とは言えないのではないですか？」

優しく、それでいてキツパリと、理事長は女生徒の抗議をいさめる。

絵「しかし！」

？「エリち。」

さらに語調を強めていた少女を今まで一言も発していなかったらしい子が呼びかけた。

絵「希…」

優しく、小さな子をなだめるようなその声に名前を呼ばただけで今までのごい剣幕だった少女はかなり冷静さを取り戻したようだった。「…取り乱して申し訳ありません

ん」と理事長に謝るとそれきり黙ってしまふ。部屋の中で長い沈黙が続いていた。

……このままじゃ埒があかないな。出来れば顔を合わせたくなかったがこうなつては仕方がない。

コンコン、扉を叩くとすぐに「どうぞ。」という声が返ってきた。失礼します、と断りをいれて中に入る。

理事「あら、もう来ていたのね。」

声の主の方を向くとやはり20代から30代と言ったところだろうか。清潔感のある雰囲気を感じさせなく感じさせる女性がイスに座っていた。どうやらこの人が理事長らしい。僕は軽く会釈してそれに答えながら理事長から机を挟んで正面に立っている2人にチラリと視線を向ける。

軽く見た限りではあるが2人もかなりの美人だった。最初に目に入ったのは片方の女生徒の輝かんばかりの金髪。あまりの眩しさに光を放つていそうな綺麗な髪をポニーテールに束ねている。目鼻立ちも整っていてモデル顔負けと言った風の人物だったが、唯一その表情だけが女子高生とは思えないほど曇っていた。

もう1人は腰まである長い髪を2つおさげにしており、特徴的で優しそうなたれ目と重なって全体的に包み込むような印象が見て取れた。

2人は僕の登場に驚いたのか少しの間固まっていたが、やがて金髪の娘が「…それでは私たちは失礼します。」とだけ言うたスタスタと出て行ってしまった。もう1人の娘は謝意を示すように一瞬だけ僕に微笑みかけるとそのまま金髪の娘を追いかけて出ていく。

…不覚にもその笑顔に見とれてしまった。

理事「思春期ね。まあ年頃の男子だし仕方ないけど。」

2人がいなくなった後も扉を見続ける僕を見た理事長が小悪魔チックに微笑む。…いやあなたのそれもかなりの破壊力持ってますよ？僕はなんとか平静を装って話しはじめ。

有「…お話の前に、ちよつといいですか。」

理事「？。なに？」

顎に指をあて、可愛らしく小首を傾げる理事長。

この人ホントにいくつなんだろう……と思いつながら僕はカバンの中に入れておいた手紙をもう一度取りだした。

有「…今朝もらった前の学校の…上司、からもらった手紙です。理事長と話す前に読めって言われてるので。」

理事「…それを律儀にここまで読まずに持つてくるなんて…よっぽどその上司さんを信頼してるのね、羨ましいわ。」

さつきとは打って変わって、包み込むような優しい笑顔を浮かべる理事長。そこには大人の色気が滲んでいて、思わず顔を逸らしてしまう。

有「まあ、一応は。」

気恥ずかしさをごまかすように少し乱暴に手紙を開けると、そこにはいつもの達筆で綺麗な文字が綴られていた。

?理事長、人妻ですから?

「やかましいわボケエ!!!」

ビリビリに破いてやった。いやつーかマジでアイツ人をなんだと思ってるの!?分かってるよこんな美人が結婚してることくらい!!……あれ、なんか急に目から汗が……。慌てて汗を拭う僕に今まで黙っていた理事長がたつた一言。

理事「……ホントにいい上司さんを持つたみたいね?」

お腹を抱え、ククツという妙な音を出しながら。

* * *

笹「担任の笹原です。たった一人の男子で色々面倒もあると思いますが、困ったことがあつたら何でも相談してください。」

有「はあ…。」

場所は変わつて、職員室。理事長からの話を聞き終えた僕は担任だという笹原先生にこの学校について教わつていた。

本名、笹原京子。透き通るような白い肌に長い黒髪を惜しげもなくさらし、スーツ越しでもよくわかるくびれはモデル顔負けの彼女の体型をよく表していた。ちよつとつり目のクール系美人である。

僕の体をすり抜けるようによく通る彼女の綺麗な声に思わず実は今無理やり学校に来させられて初対面の女の子の監視を命じられていますと言いたくなつたが残念ながらそういうわけにもいかない。

この担任の先生ですら僕の本当の目的を知らないのだから。理事長の話は次のようなものだった。

理事「いいですか？乙坂君。今回の件について全てを知っているのはこの学校では私とあなた、それに高坂さんだけです。一般生徒はもちろん、教師もあなたの本当の目的

を知らない。…その理由はわかりますよね？」

先ほどとは違い、まるで仕事先の人物と話すような丁寧な口調。それが何を意味するかわからないほど僕も子供ではなかった。できるだけ真剣なまなざしを返しながら答える。

有「…まあ、そんな危険な状況を知る人が増えると暴動が起きかねませんしね」

僕の言葉に理事長は大きく頷いて続ける。

理事「その通りです。だからまず他人に目的を悟られないこと、悟られた場合も何らかの方法で広められるのを防ぐこと、これがあなたを受け入れる第一条件です。」

まあ、当然だな。

理事「そしてもう一つの条件はテスト生としての振る舞いを身につけることです。」

有「テスト生としての振る舞い…ですか？」

理事「ええ。さつきも言った通りあなたは表向きにはあくまでウチの学校のテスト生として過ごしてもらいます。なので少しでもそれらしさを出すために、青春を楽しんで欲しい、ということなのです。」

有「楽しむ…」

理事「ええ。何かに打ち込んで勉強するもよし、何か部活動に入るもよし。…まあ、やるべき事を考えると少し難しいかも知れませんが。とにかく、あなたの大切な青春をを

監視という仕事だけで終えないで欲しいのです。」

理事「…大丈夫。あなたならきつとできますよ。」

理事長はここで一呼吸おくと言った。

「だってあなたは、この学校を救うために選ばれた最初で最後のテスト生なんですから」

* * *

笹「……乙坂君！乙坂有宇君！」

有「は、はい！」

…少し強めの声で呼ばれてハツとなる。どうやら考えていてブーツとしてしまっていたようだ。笹原先生が心配そうに僕の顔をのぞき込む。

笹「…大丈夫ですか？疲れてるなら保健室に…」

有「い、いえ！大丈夫です!!」

慌てて否定する。初日から早退なんて目立つことはゴメンだ。

笹「…そうですか？それではそろそろホームルームがはじまりますし教室へ向かいま

しよう。」

先生はそう言って立ち上がるとスタスタと歩き出す。僕は慌ててその後を追った。

特に会話もなく廊下を歩く。ホームルーム前だからか廊下には慌ただしい喧騒が広がっていた。多くの女生徒が自分のクラスに帰ろうと歩いている中、チラチラとこちらを気にする視線が多くあることに気づいた。

さつき笹原先生に聞いたことによると、この学校は教師も全員女性らしいので男自体珍しいのだろう。

……試してみるか。

視線の方に目を向けると、1人の女生徒と目が合った。僕はできるだけだけ人の良さそうな顔を作ると、にこりと微笑みかける。すると女生徒はわかりやすく顔を赤くすると逃げるように走り去っていった。あわてて教室に逃げ込む少女に軽く手を振りながら僕は内心でガッツポーズをする。

……よっし!!やはり女子高だけあってこの学校の女子は男に慣れていない!しかも

なぜか全員揃いも揃って美少女だし邪魔な友利達もいない！今度こそ…いける!!

——そう。僕は今度こそ転校デビューを果たそうとしていた。確かに僕は今回高坂という少女のストッパーという役目があるが、その中でどうすごせなどとは言われていない。理事長もあ言っていたことだしここは遠慮なく僕なりに青春を楽しませてもらおう。

不要素があるとしたら、これか……。僕はバックの内ポケットに手をやる。そこには友利からの手紙の最後の一枚が入っていて、表には？あなたが開けるべきと思つた時に開けてください？と、いよいよバトル漫画の最終手段じみてきたメッセージが書いてあつた。正直、読みたくない。このまま捨てようとも思つたが、もしかしたら本当に仕事に必要な時が来るのかもしれないと思うと捨てるわけにもいかなかった。

まあ、何にせよ手紙一枚でやれることなどたかがしれてる。まさか邪魔するようなこともしないだろう。そう結論付けて手紙をしまふとまた歩き出す。教室につく頃には手紙のことは完全に頭から切り離されていた。

笹「…着きました。それでは先に私が入つてみんなに説明をするので、呼んだら入つてきてください。」

有「はい！」

考えているうちにテンションが上がってしまった、いつもより2倍ほど大きく返事をすると先生に呼ばれるのを待つ。…ああ、夢が膨らむ…。

今日はとりあえずこのクラスでトップクラスの美少女達を数人連れて校内の案内をしてもらおう、そう決めたところで中から笹原先生の声が聞こえた。

笹「……というわけで、今日から加わる新しいクラスメイトを紹介します。乙坂くん、入ってきてください。」

有「…はい！」

先生の呼び掛けにできるだけいい声で返事をする、はやる気持ちを抑えながらゆつくりと扉を開けた。

今思えばこの時僕はただテンションが上がっていただけでなく、柄にもなくかなり緊張していたのだと思う。そうでなければ説明がつかない。

———これまでにないテンションで扉に手をかけた僕は教室にかけてあった？2年2組？のプレートにも何の疑問も抱かなかった。

穂「ゆ〜う〜く〜ん!!!!!!」

有宇「…!？」

教室に入った途端、テンションMAXだった僕をはるかに超えるテンションの持ち主が僕の名前を叫んでいた。目を向けるとそこには見覚えのあるサイドポニーの少女がぶんぶんと手を振ってこちらを見ている。

……バ、バカな。アイツは確か2年生だったはず…!？あまりの驚きに何もできずにいると、笹原先生は少し安心したように言った。

笹「あら、高坂さんと乙坂くんは既に知り合いのようですね。ちょうど良かった、じゃあ乙坂くんは高坂さんの後ろの席を使ってください。」

有「は、はあ…。」

完全に思考停止になってしまった僕は言われるままに席に向かう。その間に先生は軽く紹介をしてくれていた。

笹「先程も言ったように、乙坂君は実際の年齢は一つしたの1年生ですが、成績が優秀であることとテスト生としての都合で2年生として過ごしてもらおうことになっています。皆さん、仲良くしてあげてくださいいね。」

有「……。」

……この意味不明な状況に心当たりのできた僕は先生に言われた窓際端の席に荷物を置くと無言で最後の手紙の封を開けた。

？どーせバカなんだし2年でも1年でも一緒っしょ？笑？

笹「乙坂くん？窓を開けてどうしました？」

有「いえ、急に風を浴びたくなりました。」

窓を全開にすると春風が教室に流れ込んでくる。あまりの気持ちよさに手を広げると春の心地よい風が僕が今さつき作った即席の紙吹雪をまるで桜の花びらのように飛ばしていった。

……そうだよな。アイツが本当に仕事に必要なことでこんな不確定要素を使うわけないよな……。

……まあ、いい。確かに仕事の都合上高坂と同じクラスの方が都合が良いのは確かだし、どこの学年だろうとやることは変わらない。僕は誰にも聞かれないように小さくため息をすると、クラスメイト達の方に向き直って言った。

有「乙坂有宇です。色々忙しい時期に転校してきて迷惑をおかけしますが、仲良くしていただけるとても嬉しいです。」

にこやかな笑顔とともに言葉を締めると、何人かの女生徒が嬉しそうに頬を染めていた。とりあえず第一段階は完了だ。

笹「それではみなさん、これから仲良く——穂「はいはいはいは——いい!!」——
——何ですか？高坂さん。」

穂「ゆうくんに質問したいです！」

先生の締めめの言葉を遮る声に視線を向けると、そこには大きく上げた手を左右に音が鳴りそうなほど振っている高坂がいた。先生は小さくため息を吐きながらも先を促す。

笹「……はあ。どうぞ。ですがあまりプライバシーに関わるようなことは聞かないように。」

先生の許可が出た高坂は嬉しそうに僕の方に向き直ると、心底楽しそうな笑顔とともに言った。

穂「昨日会った友利さんって人とはどういう関係ですか!!？」

有「お前先生の話聞いてた!!?」

あまりに完璧なボケ過ぎて素で突っ込んでしまった。クラスメイトが驚いてこちらを見てくる。だめだ、ここで挑発に乗れば僕のハーレムの野望が潰えてしまう。平常心、平常心……。なんとか心の平静をとりもどした僕は一度咳払いをして質問に答えた。

有「……コホン。えーつと、友利さんとは前の学校で一緒に生徒会をやってました。それ以外は特にありません。」

関係はない、ということを強調して言うが高坂は少し不満そうに口を尖らせて言った。

穂「えー!?!昨日はあんなに熱く語りあっていたのにー!?!」

有「口論していたの言い換えの中で世界一誤解を招きそうな言い方だなオイ!?!」

……ダメだ!! わかっていても思わず突っ込んでしまう!! 完璧なポケに本能が抑えきれない!! ツツコミ疲れで息を荒げている僕を見て高坂は不思議そうに首をかしげている。まさか素か!? 素なのか!?

僕があまりの驚きに何もできずにいると、高坂はあ、そういえばもう1個聞きたいことがあるんだった、とまた悪魔のような口を開いた。

穂「そういえばゆうくん……」

一瞬のタメ。その間に僕は普段使わない脳みそをフル回転させて考えうる質問とそれに対するベストな回答を導きだそうとしていた。

何の質問が来る? 能力のことを人前で話すのはNGだと友利から強く言われているので絶対にはいはずだ。なら黒羽についてだろうか? しかしそれなら特に問題は無い。なら高城が不審者気味の行動を起こしてだろうか? いかにもありそうな話だがそれも問題は無い。もし聞かれたら彼は自分をキリストの生まれ変わりである神の子の子とかいうものはやそれは人間なんじゃないかというツツコミを受けそうな設定に浸る可哀想な人なのだと答えよう。もしかしたら高城に迷惑がかかることもあるかもしれないが構う必要はない。今はとにかく自分の保身に集中する――

——しかし、ここで口を開いた高坂が言った言葉は、自己紹介の質問にふさわしい100%僕に関する質問だった。

穂「ゆうくんが友利さんに言われてた？シスコン？ってどういう意味ですか??」

一瞬、空気が凍った。

が、この質問も特に問題は無い。やることはわかりきってるからだ。僕は余裕の笑みを崩さないままゆっくりと膝を折り地に頭をつけて言った。

乙坂「もう勘弁してくださいお願いしますすううううううう!!!」

——この日、音ノ木坂学院には転校初日に土下座して絶叫する男子生徒という新しい伝説が生まれ、一部の女生徒達には男は土下座魔という新しい偏見が生まれた。

……僕の転校デビューが失敗したのはいうまでもない。

第5話 予感

—— 転校初日、放課後の学校案内。健全たる男子諸君なら、そこにはこれからの学校生活の希望と期待を感じさせるに十分すぎる天国を想像するだろう。

その学校がなぜか美少女揃いで、しかも自分以外全員女子の学園ともなればなおさらである。

そんな男子の妄想のすべてを具現化したような状況の中、僕は……

穂「ゆーうーくーん！はやくはやくー!!」

有「…ちくしよお!!」

……4人分の荷物を持ちながら学校中を連れ回されていた。

有「くそ……本当なら今頃は天国ハーレムを形成しているはずだったのに……」

三つの背中を追いかけながら思わず毒づく。彼女達に追いつくために少し歩くスピードを上げながら、僕は二時間前のことを思い出していた。

* * *

有「はあ……」

二時間前、転校初日の自己紹介で盛大にやらかしてしまった僕は、当然誰からも声がかけられることもなく（目線だけで言えばやらかす前より強い気がする。痛いけど）放課後に突入し、教室に座ったまま大きくため息をついていた。当然、僕の周りには生徒は1人も立っていない。それどころか半径2メートル以内には誰も入ってこなかった。すわ新しい能力でも目覚めたかと思っただけだ。

いつまでもむやみに傷つく必要も無いか……。僕はカバンに貰ったばかりの教科書をつめると立ち上がった。

有「…帰ろう。」

? 「えっ! もう帰っちゃうの??」

有「!？」

独り言に返事があつた。

驚いて声のした方に振り向くと、そこには僕の天国ハーレムをぶつ壊した張本人、高坂穂乃果が立っていた。

穂「せっかく転校してきたんだから校舎見ていけばいいのに…。あ! そうだ! ちょうどいいから穂乃果達が学校案内してあげる!」

有「は？いや、僕は…。」

穂「いいからいいから！海未ちゃん！ことりちゃん！行こー！」

高坂はそう言うのと僕の腕をつかんでぐいぐい引つ張り始めた。隣にはいつの間にか昨日会った2人も来ている。

穂「それじゃあ練習場所探しにしゅっぱーっ！」

有「は？いや、練習場所探しってどういう…いや、その前に腕を離せ！痛いから！かなり無理な方向に引っぱってるからそれ！いや、ちよ、だから…人の話を聞けえー！！！」

僕の叫びは無慈悲にも午後の空に溶けていった。

* * *

有「や、やつと追いついた……。」

荷物を背負ったり持ったり首にかけたりしながら歩いてなんとか追いつくと3人はなにやら空き教室の前で何かを話している。それを遠巻きに眺めながらぜえぜえやつてると、少女の中の1人が僕に気づいてとてとてと寄つてきた。

？「大丈夫ですか？申し訳ありません。今日は少し多めに教科書を持っていたものでして……。」

有「あ、じゃあこれが君のなんだ。」

僕は四つのカバンのなかでも最も重量のあるそれを持つ右手を掲げる。確かに中々の重量だ。

僕「でもこんなに重いものを持てるなんてすごいね。なにか部活でもやってるのか

な。ええと……」

なんと呼ぶべきか悩んでいると、少女はそう言えば自己紹介がまだでしたね、と言うと改めて僕に向き直って言った。

海「はじめまして。園田海未と申します。お察しの通り弓道部に所属しております。」

そして深々と頭を下げてくる。その美しいとまで言える丁寧なお辞儀に思わず僕も頭を下げそうになりながら言った。

有「へえ、弓道部なんだ。よろしく。えつと…園田……さん、かな。」

海「言いくいようでしたら呼び捨てでも特に構いませんよ。」

有「じゃあ……海未？」

ふざけてそう言うと、園田さんは「んなっ…！」と言うとさっきのお辞儀より更に深く顔を俯かせた。髪の間から見えている耳や顔は面白いほど真っ赤だ。

海「そ、それはちよつと恥ずかしいので…できればほかの呼び方で…」
顔を真っ赤にしたまま言ってくる園田さん。

有「いいじゃないか別に。綺麗な名前なんだし。」

実際、透き通るような白い肌とその凛々しいまでの立ち姿に海未という名前はとても似合っていた。

海未「き、綺麗だなんて…。」

園田さんは益々顔を俯かせるとそれきり黙ってしまった。よほど恥ずかしいのか、少し涙目になっている。

…ヤバイ、Sに目覚めそう。

？「いくら。」

コツン、と。

さらに園田さんを虐め…もといもつとお話をしようとして僕が口を開こうとしたところで甘い声と共に小さな握りこぶしが僕の頭に当てられた。

声の主の方に振り向くと、そこには腰に手を当て、ぶんすかといった表現がよく当てはまるような少女が立っていた。

こ「海未ちゃんはすっごい純情さんなんだから、あんまりいじめちゃダメ！」

そう言つて手でバツテンを作る。その仕草はとても可愛らしく、女の子らしい、という第一印象がさらに加算される。

少女はバツテンの作った手の片方をそのまま僕の前に出して言った。

こ「私の名前は南ことり。よろしくね、乙坂君♪」

有「こちらこそよろしく。南さん。」

その手を握りながら答える。

こ「私も呼び捨てで構わないよ？なんなら名前呼びでも♪」

有「いや、同学年とはいえみんなは一応年上だからね。そういうわけにもいかないよ。」

南さんのありがたい申し出を断る。正直さん付けはなれていないので嫌なのだが、一つ下の男子に呼び捨てにされると怖がつてしまう子が出てしまうかもしれないしな。ちなみにその時「なぜ私にはその気づかいがなかったのでしょうか……？」とか聞こえてきた気がするがスルー。

こ「まあ、でも私たちなら大丈夫だよ☆それにしてもすごいよねー。私飛び級なんて初めて見たよ」

海「そうですね。私もそれなりに勉強はしていますが、一つ上の学年にいくなんて考えもつきません。」

有「あーいや……」

手放しに褒められ思わず言い淀む。確かに僕の前の学校の成績は良かったが、それは能力によるカンニングによるものだし、そもそも今回の飛び級は高坂の監視のためだ。

穂「ホントだよね！穂乃果は成績があんまり良くないから羨ましいよ！」

いやなんでお前まで事情を知らないんだよ。

いきなり話に入ってきた高坂に思わずツッコミそうになり慌ててこらえる。きっと今のは2人に監視のことがバレないようにするための高坂の演技なのだろう。案外

色々考えるやつだ。

穂「ねえねえ、勉強しなくてもテストで点を取る方法ってないの？」

有「……。」

あかん、これ素や。

色々考えてしまった自分がアホらしくなった僕は話を変えることにした。

有「……じゃあお言葉に甘えて呼び捨てで呼ばせてもらおうよ。よろしくな、高坂、園田、南。……ところで今は何をしてる途中なんだ？」

高「え？だから練習場所探しだよ？」

僕は最初学校案内してあげるって言われて（無理やり）連れ出されたんだけど……。キョトンとしたように可愛く首を傾げる高坂に思わずツツコミたくなつたが話が進

まなそうなのでやめておいた。

有「…その練習場所探しつてのがどういふことかって話だよ。お前ら何の練習するつもりなんだ？」

僕がずっと聞きたかった疑問を口にする、園田は「まだ言つてなかつたんですか!？」と高坂に詰め寄り、南は「あ、あはは」と苦笑いをする。

2人に視線を向けられた高坂は「あ、そう言えばまだ言つてなかつたかも……?」と言ふと力なく笑つた。3人はそのまま何か話しているようだったが、しばらく待つと高坂が僕の前に出てきて言つた。

穂「じゃあ改めて言つとこっか! ゆうくん、私達ね! スクールアイドルを始めようかと思つてるの!」

全力で、「驚いた? 驚いたでしょ?」という顔をしてくる高坂に僕はたった一言――

有「……すくーるあいどる？」

* * *

有「…廃校を阻止するために学校の代表としてアイドルを、ね……。」

穂「うん！私達がうーーんと頑張つて、この学校のこともつともつと知ってもらえば、きつと音ノ木坂に來たい！つて思つてくれる人はたくさんいると思うんだ！確かに色々難しいこともあるだろうけど……やってみなくちゃわからないしね！」

時間は流れ、夕方、僕と高坂は校門前で部活の持ち物を取りに行った園田と生き物のエサやりがあるという南を待っていた。

あの後、僕は結局練習場所探しに付き合ひ学校中を歩き回り、その結果練習場所は屋上に決まった。どうやら彼女らはそこでアイドルを目指して練習するらしい。その活

動を通して学校のアピールし、廃校を阻止しようとしているらしいが……。

有「…まだグループの名前も決まっていな……。」

僕の呟いた言葉に高坂がビクツ、と体を震わせた。

穂「いいじゃん！大切なのは中身だよ！」

有「…その中身、まだ曲もないらしいな。」

穂「ヴツ！」

さらに追い打ちをかけると高坂は何か刺されたように身をよじる。

穂「な、中々痛いところをついてくるね、ゆうくん……。」

弱点が多すぎるんだよ。

とは、さすがに言わなかった。

有「…なあ…：…そもそもなんで廃校を食い止めようと思ったんだ？」

——代わりに、初めてあつた時からずっと聞きたかつた疑問を口にする。高坂は少しだけ目を開くと、校門についている「音ノ木坂学院」と書かれたプレートに手を添えながら話し始めた。

穂「私ね、お母さんもおばあちゃんもこの学校に通つてたんだ。」

すつかり夕日に包まれた校舎を見あげ、続ける。

穂「だからかな、私ここにいるとなんだか家にいるみたいで…すごく、心があつたかくなつて、安心して……」

彼女はプレートに触れていた手を離し僕の方に向き直ると――

穂「…だから私、この学校が、ここの人たちが大好きなんだ。」

――そう言って、笑みを浮かべた。

その儂げな笑顔に、僕は何も言えず固まってしまふ。これまで見たことのないような高坂の綺麗な笑顔を僕はただ黙って見ることしかできなかった。

時間が止まったんじゃないかという錯覚するほどの静寂が流れる。心臓のいつもより少し速い音だけが聞こえていた。

穂「…あつ！海未ちゃん！ことりちゃん！」

——どのくらいそうしていただろうか。高坂の声にハッと顔を向けると用事を済ませたらしい園田と南がこちらに向かって歩いてきていた。2人に手を振りながら走り寄っていく高坂の背中を目で追う。僕はホツとして…少しだけ残念に思いながらそちらに歩き出した。

穂「あつ！そうだゆうくん！」

少し進んだところで高坂が僕の方に振り向いてきた。そのまま走ってきた道を戻ってくる。みれば、園田と南も僕のもとへ向かってきていた。

有「なんだ？」

穂「え、えーつと……」

とりあえず一番最初に来た高坂に訪ねてみると、彼女は珍しく少し言い淀む素振りを見せる。結局質問に答えてくれたのはあとから来た園田だった。

海「実は、乙坂君に私たちのアイドル活動のお手伝いを頼みたいんです。」

有「お手伝い？」

こ「うん、私たちだけだと衣装とか歌とかどうしても女の子よりになっちゃいそうだから…。男の子の意見もあるといいねってみんなで話してたんだ♪」

穂「あとはライブの準備とかにちよつとだけ手伝ってもらったりとか…ダメかな？」

有「……。」

少しだけ目を伏せ、僕の顔を見上げるようにして頼んでくる3人を見ながら考える。昨日までの僕なら間違いなく断っていただろう。たとえ任務上それを断るわけにはいかないとわかっているとしても、渋っていたであろう事は間違いない。

でも、僕は高坂の決意を聞いてしまった。

あの笑顔を見てしまった。

この子達の成長をそばで見守っていたいと……そう願ってしまった。

有「…ああ、いいよ。」

その言葉は驚くほど自然に出てきていた。

穂「ホントに!!? 良かったあく。断られたらどうしようかと思ったよー。」

ふうくと長いため息を吐き、全身の力を抜く高坂。他の2人もさすがにそこまであからさまな事はしないものの、表情はどこか嬉しそうだ。

穂「あーあ。安心したらお腹空いてきちゃった! みんな! 帰りになんかお菓子買ってこようよ!」

そう言って歩き出す高坂に、園田が「ダイエットはどうしたのですか?」と言いなが

ら付いていく。南も高坂の横でニコニコ笑いながら歩いていった。

…相変わらず仲のよろしいことで。

それを眺めながら追いかけてしようとした僕に、唐突に一つの思考が浮かんできた。

——僕なんかあの3人の中に入る資格などあるのだろうか？

突然浮かんできた思考に僕は思わず歩きだそうとした足を止めてしまう。いや、それは心の声かもしれない。

ずっと人を騙していたお前に人を助けることなどできるのかと。

自己中心的に生きてきた僕に、いまさら彼女達の隣に立つ資格などあるのかと。

責めるようなその声にも言い返すことが出来ない。

……そうだ、僕は元々自分のことしか考えられない人間だ。目的のためなら平気で人を犠牲にし、蹴落としてきた人間だ。

……そんな僕に学校のために頑張る彼女達の手助けなんて――

穂「おーい！」

――顔を上げると、高坂が不思議そうに僕に手を振っていた。

穂「どうしたのー？はやくおいでよー！」

――相変わらず、間の抜けたような、悩んでいることが馬鹿らしくなるようなその声。

気づくと僕は笑っていた。

《 行くのか？ 》

有「ああ。」

今度こそしつかり聞こえてきたその声にノータイムで返事を返す。

《 どうして。邪魔になるかもしれないの？彼女達の迷惑になるかもしれないと思わないのか？ 》

有「ああ。だつて…」

それでもしつこく責めてくる声に僕はニヤリと笑いながら言つてやった。

有「や・つ・て・み・な・く・ち・や・わ・か・ら・な・い・だ・ろ・う・?」

穂「おーい!はーやーくー!」

有「…ああ！今行く！」

そしてもう一つのしつこい声、高坂の方に僕は駆け出していく。

——もしかしたら僕も、こいつらに会って少しずつ変わっていつてるのかもな。

そんな思考は、暖かく体の中を吹き抜ける風と共に、空高く飛び上がっていった。

第6話 朝練

有「……眠い。」

いつもより1時間以上早く起きる。元々学校が少し遠くなったせいで早起きなのに、さらにそれより早い時間に起きたので、頭はいつもの数倍ボーツとしていた。

「なんで僕が朝練なんか…。」

思わず毒づきながら顔を洗って眠気を払う。昨日、僕はあの後高坂たちと他愛もない話をしながら帰った。その分かれ道の直前、南に頼まれたのだ。自分達は明日の朝、神明神で朝練をするから、できたら見に来てくれないか、と。

色々あつてその時のテンションが異常だった僕はあまり深く考えずにOKサインを出したが、実際に起きてみると全てを投げ出して布団に帰りたくなるくらいは苦痛だっ

た。高坂の笑顔？決意？何ソレオイシイノ？

後ろ向きになりがちな思考を変えるため、歩未の顔を見に行く。

さすがの歩未もまだ寝ていた。起こすのは悪いのでそつと扉を閉めようと思ったのだが、ちょうどそのタイミングで歩未は目を覚ましたようだった。

歩「…あれ？有宇お兄ちゃん今日はずいぶん早起きなのです？」

時計を見ながらそう言ってくる歩未。

有「ああ。実は今日から部活の朝練なんだ。」

練習するのは僕じゃないけどな。

歩「ええっ!?それは大変!すぐに朝ごはんの準備をするのですー!」

そう言って飛び起きようとする歩未を手で制しながら続ける。

有「いや、言ってなかった僕が悪い。今朝は何か適当に買って食べるよ。」

歩未はしばらく考え込むと、

歩「……有宇お兄ちゃんはいつごろお出かけするのですか？」

と聞いてきた。

有「んー、あと30分ちよいくらいか？」

僕が答えると歩未はパツと表情を明るくさせ、

歩「なら、大丈夫ですー！あゆは有宇お兄ちゃんと朝ごはんを食べたいのでござるー！」

と、言ってきた。そうまで言われては是非もない。僕ははね起きてわちゃわちゃと布

団をたたみ始める歩未に「ありがとう。」と声をかけながら扉を閉めた。

* * *

有・歩「いただきます。」

歩未を起こしてから10分後、僕らは2人で食事の席に着く。献立はトースト2枚と目玉焼き、それにヨーグルトと牛乳だった。あの短時間で身支度を軽く済ませた後これを2人分用意するとは全くもってできた妹である――

有「…甘い…。」

――甘すぎるピザソースがこれでもかというほどトーストに塗ってなければ。

一口目から口いっぱいに広がる飽きるほどの甘さに思わず感想を口に出してしまおう。不思議そうにこちらを見てくる歩未の視線を誤魔化すようにムシヤムシヤと残りのトーストを口に放り込んだ。

……確かにタイムリープ前に僕はこのピザソースには大切な思い出が詰まっているということに気づかせてもらえたが、この砂糖直接いれてるんじゃないかというような甘みだけはどうしようもなかった。

どうにかして歩未にコイツを使う頻度だけでも減らさせないとなあ。こうなったら僕が料理を作ろうかなあ。でも歩未は多分ピザソースが食卓に出なくなったら寂しがるだろうしそもそもやらせてくれないんだろなあとか考えていると、歩未から声をかけられた。

歩「そう言えば有宇お兄ちゃん。何の部活動に入部したのですか？」

僕はこれまたピザソースがたっぷりと練り込まれているヨーグルトを口に含みながら答える。万能調味料すぎるだろ……。

有「ああ……部活っていうかマネージャーみたいなものだよ。……スクールアイドルって知ってるか？」

僕が聞くと歩未はキラキラという音が聞こえそうなほど顔を輝かせると、

歩「もちろんでござるー!!」

と叫んだ。

……面倒なことになりそうな予感。僕の予想変わらず歩未は興奮冷めやらぬと言った表情で、テレビをつけて話し始めた。

歩「スクールアイドルは今や新しい一つのジャンルとして確立された大人気のアイドルなのでござるー!!」

録画していたのだろうか、歩未がつけたテレビには「大人気！スクールアイドル特集

！」というタイトルのニュースが流れていた。

歩「日本各地で次々と生まれ、自らで作った歌を歌う彼女達の勢いは今や既存のアイドル達に勝るとも劣らないものとなっているのですー！」

有「へえ…自分達で歌を作っているのか。」

僕が呟いた独り言に、歩未は「もちろんなのです！」と食いつく。

歩「曲だけでなく、歌詞、振り付けまで全て自分達で考えだされそれぞれに大きな個性を持っていることもスクールアイドルの魅力の一つなのでござる！」

歩「…そしてそのスクールアイドルの頂点に立つ存在が——」

ここでずっと僕の顔を見て語っていた歩未がテレビの方に視線を向ける。僕もつられてそちらを見た。

歩「秋葉原UTX学園所属、優木あんじゅ、統堂英玲奈、綺羅ツバサの三人組ユニッ

ト系アイドル、A—RISEなのですー！！！！」

ニユースには「大人気！A—RISEの秘密に迫る」といった見出しで、画面はステージに三人で立って踊っている少女達とその周りでもものすごい盛り上がりを見せる観客達を映していた。

盛り上がる観客達、そしてなにより中央で踊る少女達のオーラに圧倒されている間にも歩末の語りは続く。

歩「甘いボイスと素晴らしいプロポーションで観客の目を虜にする優木あんじゅ。凛々しい声とキレのあるダンスで女性からの人気も高い統堂英玲奈。そして、それら2人をも圧倒するほどの存在感を放つリーダーの綺羅ツバサ。今のスクールアイドルの爆発的人気はこの3人によって生まれたと言っても全く過言ではないのでござるー！！」

——ニユースキャスターの話すスクールアイドルについての概要、それぞれころかいつの間になくなっていった朝食さえも僕には遠い出来事のように感じられた。

歩末の興奮気味の声が遠ざかっていくのを感じながら、僕は画面で流れ続けるライブの映像を眺め続けた。

* * *

穂「も、もうダメ…死ぬ…。」

こ「もう足が動かないい…。」

有「な、なんだこれは…?」

1時間後、A―RISEのライブ映像に魅入ってしまい集合時間より少し遅れてしまった僕が見たのは、神社の前で礼儀も何もなくへたり込む2人の女子高生だった。

有「朝からここまでキツイものやんのかよ…。」

海「いえ、そこまで厳しい物でもないはずなのですが…。」

声が出た方を向くと、ひとり涼しい顔でストレッチをしている園田がいた。

海「毎日2回、ここを5往復しているだけですし。」

神社の前の階段を見ながら言う園田。そこにはなかなかの長さとかかなりの角度を誇る階段がまっすぐ伸びていた。

有「へ、へえ。5往復…ね。」

……弓道部パネエ。そりや何もしてなかった女の子がいきなりこの長い階段を5往復したらそうなるわ。

…どうやらここを歩いて登ってきただけで少し息があがってしまったことは言わない方が良さそうだ、と思いながら話を進める。

有「でも、スクールアイドルに体力なんて必要あるのか？」

僕が質問すると園田は「もちろんです！」と食い気味に言ってきた。

海「そもそも、何曲も連続で踊りながら歌っているのです。体力が必要ないはずがありません。しかも、アイドルはそれを全て笑いながらこなしている。そう考えるとかなりの、それこそ運動部並の体力が必要と言っても過言ではないでしょう。」

有「へえ……。」

そりやそうか。A—RISEが全員歌い終わった後も涼しい顔していたから気づかなかったが、普通の女子高生ならあのキレのあるダンスを踊っただけで息があがってしまうだろう。

海「そんなわけでトレーニングにちょうどいい階段があるこの神社で朝練をしているのです。ほら2人とも！そろそろダンスの練習を始めますよ！」

園田が呼びかけると南は「ふええーん……。」と言って立ち上がる。高坂も「海未ちゃん
の鬼〜！」と言いながら体を起こした。

海「あまり休んでると学校に遅れてしまいます。はい！まずは軽くでもいいのでもう一度ストレッチ！」

2人がしぶしぶ（というか疲労困憊）といった体ながらもしつかりと体を伸ばし、その後3人で踊り始めるのを僕は遠巻きに眺めていた。

へえ：案外ちゃんとやってるんだな。

？「フムフム、なかなか眼福な光景やなあ。」

有「!?」

——思考が先読みされた——
 じゃなく、僕では考えもつかないようなことを平然と言つてのけた主に目を向けると、そこには巫女服を着てホウキを持った綺麗なお姉さんが立っていた。

有「あれ？ていうか…。」

その顔に見覚えがあった。確か昨日理事長室で生徒会長を止めてた…

希「お。覚えててくれてたん？そう、ウチは東条希。音ノ木坂学院の副会長や。」

そう言つて見せた笑顔は、昨日思わず見とれてしまったそれに間違いなかった。

有「…おはようございます。東条先輩。えっと、僕は…」

希「乙坂有宇くん、やろ？聞いてるよ。2年2組に転校してきた、ウチの学院初の男子生徒。」

「僕のプロフィールをペラペラと話す副会長。まあそりゃ知ってるよな。昨日話してたし。」

希「なんやエリチは色々と警戒しとるみたいやけど…ウチは歓迎するで。ようこそ、音ノ木坂学院へ。」

そう言って出された右手をぎこちなく握り返す。エリチ、というのは昨日も言った生徒会長の名前なのだろう。

親しいのだろうか。そんなことを考えながら言葉を繋げる。

有「東条先輩はここで何を？」

希「アルバイト。ここで毎朝掃除させてもらつとるんよ。どや？巫女服、結構似合つとるやろ？」

その場でぐるりと一周する東条先輩。

有「いやまあ…もちろん似合ってはいるんですけど…。」

ちよつと女子高生ではありえないレベルで主張の激しいものがあるような……。

和服つてそういう主張がしにくい服だと思っただけだなあと思いつつ見ていると、

東条先輩はニヤつと笑つて話しかけてきた。

希「あら〜？乙坂くん今どこ見てたんかな〜？」

有「べ、別にどこも見てませんよ！」

僕が慌てて否定すると東条先輩はさらに笑みを深くして続けた。

希「別にええんやで〜？男の子なんやし。そや！乙坂くんこのままこの掃除ちよこーつとだけ手伝ってくれへん？」

有「掃除……ですか？」

脈絡のないお願いに思わず聞き返すと東条先輩は満足そうにうんうんと頷く。

希「そう。もし手伝ってくれたら、ちよーっぴりいいこと、あるかも知らへんで？」

そう言いながらホウキを差し出す東条先輩。こ、これは――

海「…乙坂くん？」

――ほとんどホウキをつかみかけていた僕の手を掴んだ人物に目を向けると、そこには今が春とは思えない冷気と、ここが日本とは思えないほどの殺気を放つ園田だったものが立っていた。

有「えーつと…園田さん？どこから聞いて…？？」

海「副会長が「今どこ見てたんかな〜？」と言っていた辺りからですね。」

有「それ一番ダメなところですよねえー！！？」

僕が思わず叫び声をあげたのとほぼ同時のタイミングで、

希「あら残念♪ほなな乙坂くん♪」

と言いのこして東条先輩が逃げていった。つーかアンタからならコイツが来るの絶
対見えてたよねえ!!

「.....」

有「……………」

お互いなにも喋らず、場には長い静寂が流れる。いつもなら美少女と2人きりというドキドキのシチュエーションだが、もちろん今の僕は別の意味でドキドキだった。

海「…乙坂くん——」

ようやく顔を上げる園田。その表情はいつもと何も変わらない、とても魅力的な笑顔だった——たった一つ、目の光彩さえ消えていなければ。園田はその綺麗すぎる笑顔のままこう告げた。

海「——私の見たところ乙坂くんもかなり運動不足のようですし、ここはひとつ、基礎体力トレーニングをしてみてはいかがでしょう？20往復ほど☆」

……死刑判決だった。

有「いや、あの園田さ「なにか文句が？」今すぐ行ってまいります！」

今までの倍以上の殺気を感じた僕は超ダツシユで駆け出す。あと3秒判断が遅れていたら間違いなく殺られていた。

海「あ、そうそう。あまり遅くなると学校に遅れてしまうのでタイム制限を設けておきます、遅れる事に1周追加していくので頑張ってくださいね☆」

有「こんのアクマがああああ!!!」

———もう2度と美人巫女服のお姉さんには近づかない。そう固く誓いながら僕は目の前の階段を必死に往復し続けた。

第7話

疑問

有「講堂の使用許可を取りに行く？」

穂「うん！新入生歓迎会の後にね。宣伝させてもらおうと思って！」

朝練のあと、処刑を何とか生き延びた僕は園田、南、高坂のいつもの3人組と学校へ向かう道を歩いていた。静かで車の通りもほとんどない道を4人連だつて歩きながら会話を進める。

有「宣伝って何するつもりなんだ？」

穂「そりやあもちろんライブだよ！実際に踊ってるところを見てもらうのが1番だと思おうし！」

言いながら目を輝かせ、拳を突き上げる高坂。しかし、僕がなにか言うよりも早く、横から厳しい声が飛んできた。

海「ちよつと待ってください。ライブをすることはまだ誰も言ってないでしょう！とりあえず借りてみるだけです！そもそも、曲もないのにどうやってライブをするつもりですか！」

穂「やっぱりそれが1番の問題だよねえ。」

ため息をつきながら手を戻す高坂。いや、メンバーにライブやる意志がないヤツがいるつても結構な問題だと思うが…。

それにしてもそうか。スクールアイドルは歌や振り付けまで全部自分たちのオリジナル。歩未はそれも魅力の一つだと言っていたが、そもそも普通の女子校生に作曲や衣装作りなんかはかなりハードルが高いだろう。

穂「衣装はことりちゃんがつけてくれるし…。歌詞もあるし後は曲を付けてくれる人さえ見つかればなあ…。」

言いながらガツクリと肩を落とす高坂。

有「すごいな。衣装や歌詞は出来てるのか。」

こ「うん！衣装はまだ制作中だけどね。歌詞はもう完成してるよ♪」

南がそういうと高坂が僕にキレイに折りたたまれた紙を渡してきた。顔には大きく「読んでみて！読んでみて！」と書いてある。ふむふむ。これが歌詞カードという事か。

海「ま、待つてください！」

早速みせてもらおうと開きかけた僕の手を園田が掴む。

有「なんだ？見ちゃダメなのか？」

海「い、いえ。そういう訳ではないのですが…。」

そう言いながらも決して腕を離そうとしない園田。すると高坂がじれったそうに口

を挟んできた。

穂「もう！海未ちゃんまだ恥ずかしがってるの？これ曲できたらみんなの前で歌うんだよ？」

海「そ、それは分かっていますけど…」

高坂に言い返しながらもだんだん俯いていく園田。いや、何がなんだかさツパリ分からないんだが…。

こ「…その歌詞ね、海未ちゃんが書いてくれたの。海未ちゃん、中学の時ポエムとかよく書いてたから…。」

全く話についていけない僕を見かねてコソツと耳打ちしてくれる南。なるほど……この歌詞は園田が書いたのか。そりやあポエムと同じようなノリで書いたものが人に見られるのは恥ずかしいだろう。

…それはそうと耳打ちされると息がかかってこそばゆいしあんまり近くにこられるといい匂いがして焦るから出来ればもう一回……じゃなくてやめて頂きたかった。」

穂「ゆうくん……。」

こ「あ、あの……こ、こめんね。次からは気をつけるね」

有「!?」

……しまった声に出た

見ると高坂はドン引きといった表情で僕から少し距離をとり、南は逆に顔を真っ赤にして固まってしまっていた。

有「ち、違うんだ。ええと…」

気っ!?

どうにか言い訳をしようと口を開いた僕の腕から冷気が漂ってくる。これは……殺

恐る恐る腕に視線を向けると、そこには当然ながら少し前まで園田だったものが立っていた。顔は深く俯けられ、表情は全く見えない。

海「乙坂君…どうやらまだお仕置きが足りていないようですね…」

先程までの女子と同一人物とは思えない程のその声は間違いなく今朝聞いてから絶賛トラウマ中の園田（鬼神化）だった。一瞬で生命維持の危機を感じ取った僕は必死に話題を変える。

有「…し、しかし、あの生徒会長が許可するか？」

穂「そーだよねえ。なんか私達目を付けられてるっぽいし…。」

こ「なんだかスクールアイドル自体に反対！って感じだったよね…。」

有「？。何かあったのか？」

園田の方を見ながら聞くと、さすがに答えないわけにはいかなかったのか園田が鬼神化モードを解く。た、助かった…。

海「…実は昨日アイドル部の設立しようと生徒会にお願いをしに行つたのです。その時は五人集めないと部にする事は出来ないということでした…。」

穂「その時になんで部を作りたいのかって聞かれたから「廃校を止めるためです！」って答えたら、そしてたらしもし五人連れてきても部を認める事は出来ないって言われちゃつたんだよ…。」

有「ふーん…。」

そう言えば僕も初対面の時もすごい敵意を向けられたんだっけ。まあ、それは僕の経歴自体に問題があるから仕方ないのだが確かにそれにしたって随分と余裕が無いように感じられた。

穂「だから今から使用許可を貰いに行くのも実はドキドキで…あ、そうだゆうくん付いてきてよ！」

いいこと思いついた！とでも言うように顔を輝かせて言う高坂。

有「なんで僕が…。」

穂「だってゆうくん副会長と仲いいみたいだしもしかしたら助けて貰えるかもしれな

いじゃん！」

いや、東条先輩とはあの時初めて話したただけだな……。とはいえ、確かにもう一人部員も増えているという事をわかりやすく示した方が説得はしやすいかもしれない。でもなあ……。

有「いや、僕あの生徒会長苦手で——」ところで、乙坂君、ことりへのセクハラ発言のお仕置きについてですが——でも他でもないお前らの頼みを僕が断るわけがないよな。よし、任せろ。」

園田が形のいい細い指をポキポキと鳴らし始めた瞬間、僕は反射的に頷いていた。命の危機に苦手がどうか言ってられないよね！

* * * *

穂「はあーっ…：疲れたあ。」

有「何とか許可は貰えたけどな…。」

一時間後。何とか生徒会長から使用許可を貰うことに成功した僕と高坂は教室に戻ると緊張が一気に解けて机にへナへナと倒れ込んでいた。

海「いや、穂乃果はともかく乙坂君はずっと立っていただけのようない気がするので…」

こ「あ、あはは…。」

そんな僕らを呆れるようにして見下ろす園田と困ったように笑う南。

…いやお前確かに僕はずっと立っていたんだけどその間ずっと会長に睨まれてつづけてたんだからな？射抜かれすぎて体に穴があくかと思った。もう視線で人が殺せるんじゃないかっていうレベル。

有「まあ、でも東条先輩のおかげみたいなものだったけどな…。」

僕の言葉にそうですねと頷く園田。実は最初は会長も渋っていたのだがその時一緒にいた副会長である東条先輩が口添えをしてくれて何とか許可を貰えたのだった。

話の後でこそ「またいつでも掃除、手伝ってな?」とか言つて鬼神化園田を出そうとしていたものの、少なくとも今のところはあの先輩は僕らの味方をしてくれているようだった。

…それにしても…

有「何で会長にはあんなに目の敵にされてるんだ…?」

穂「謎だよねえ…。」

真つ先に浮かぶのは僕がいるからだろうが、3人の話を聞く限り僕が関わる前からあたりが強かつたらしい。コイツらが個人的な恨みを持ったとは思えないし…となる…

有「…スクールアイドル自体と何か関係あるんだろうか？」

呟いた言葉は1時間目始業のチャイムと重なってしまい、誰にも届く事はなかった。

* * * *

有「で、ここが音楽室、と…。」

昼休み。僕は一人で学校を回って教室の位置を確認していた。もちろん、昨日高坂のせいで出来なかった学校案内の続きである。

本当は責任を取って高坂に案内役をやらせようと思ったのだが、購入のパンがどうのと逃げられた。アイツホントに自分のやりたいことしかしねえな……。

「んっ…の音……。」

一通りの探検がすんだので教室に戻ろうとした時、中からピアノとそれに合わせて歌う声が聴こえてきた。心地よく体をすり抜けていくようなその歌の主が気になって、こっそりと部屋の中を覗く。

有「……………うおお。」

中にいたのは器用にも、目を閉じたままピアノで音を奏でながら歌う一人の少女だった。ネクタイの色からして1年生だろう。とてもキレイな赤毛に少しカールがかかっている。歌い、奏でているのはオリジナルの曲なのだろうか。歩未の趣味の都合上、色々な音楽を聴いたことのある僕にも何かわからなかった。少女はそれを高らかに、キレイに歌いあげる。

そんな少女の歌声やピアノもさる事ながら、何かに導かれるように音楽を奏で続ける手、そしてそれを気持ちよさそうに歌う少女は、それ自体が1枚の絵のようで、僕は目と耳の両方で魅了されてしまう。演奏が終わった時、僕は思わず手を叩きながら教室に

入っていた。驚く少女に構わず話しかける。

有「オリジナルの曲なのかな？とてもいい歌だった。」

少女はしばらく黙っていたが、やがて呆れたように呟いた。

真「またなのね…。」

有「また？」

真「昨日もいたのよ。演奏を止めた途端いきなり手を叩きながら教室に入ってきてオマケに「アイドルになって私たちに曲を作ってくれませんか!!？」って言うてきた人が。」

有「へ、へえ……。それは変な人だね。」

ものすごく心当たりがあるが同類にされたくないもので黙っておこう。曲はどうするのかは全く決まっていらないのかと思つたら一応目星はつけてあつたらしい。

有「それで…その人たちの曲、作るの？」

真「作らないわ。」

即答。予想していた答えだったが、その声に微かに嫌悪感が含まれている気がして違和感を覚える。

有「…どうして？廃校のためなんだし作ってやるのもいいんじゃないのか？」

真「…あなたあの人達の友達かなにか？」

有「…いや、クラスメイトでそんな話が聞こえてきただけだよ。」

思つたより低く出てしまつた声に少女は一瞬だけ怯むような表情を見せたが、すぐに顔を戻すと吐き捨てるように言つた。

真「…軽いからよ。なんか歌ってる人も聴いてる人もチャラチャラしてる感じがして…。」

軽いから。その理由は僕にもわかる、というか同意できると言ってもいいものだった。確かに、一部のアイドル達は自分たち自身を魅せるということにかなり重きをおいている。それは大切なことで、必要なことだからそこに真剣に取り組んでいることには違いないのだろうが、歌を歌っているなら音楽で勝負しろという意見が出てくるのも分からなくはない――

有「……それは違う。」

——だから、知らずのうちに出ていた自分の声にはかなり驚いた。少女が驚いている間にも僕の無意識の話は続けられる。

有「確かに、アイドルのような人達の歌っている歌は軽いと言われても仕方ないのかもしれない。でも、軽いからこそその歌は多くの人に届く。音楽に詳しくない人でも、その歌を楽しむことが出来る。それに……」

——いつの間にか、無意識でなく自分の意思で言葉を紡いでいた。僕は語る。

有「…それに、本当にチャラチャラしているだけの人達は本当にごく一部だ。大抵のアーティストは自分たちの歌やパフォーマンスに誇りを持っている」

—— 転校先の自己紹介で、芸名を使ったやつの事を思い出しながら。

有「そしてその人たちを馬鹿みたいに真剣に応援するファンがいる。」

—— 今朝もA—RISEに鼻血を出しかけていた妹や、かつてどんなに周囲に引かれても自分の好きなものを通し続けた馬鹿のことを考えながら。

有「……そしてその歌は、誰かの夢や希望になりうるんだ。」

——僕に向かってそれまで見せたこともないような素直な表情で夢を語ってくれた、一人の少女を思いながら。

そろそろ昼休みも終わる時間だ。僕は少女に向き直ると言った。

有「君の歌、僕はもつと聴いてみたいって思ったよ。それに、僕だけじゃない、沢山の人に聴いて貰いたいってな。」

少女の大きく見開かれた目を見ながら僕は右手を差し出した。

有「2年の乙坂有宇だ。よろしくな。……曲作りの件、もう一度考えてみてもいいんじゃないか？」

真「……西木野真姫よ。そこまで言うならもう一度考えてあげるわよ。答えは変わらないと思うけど。」

西木野はそう言って顔を背けながらも手を握り返してきた。背けられた横顔から見える頬が少し赤く染まっている。

彼女が高坂達の作曲を引き受けるのもそう遠くはないだろう。そんな不思議な確信を持ちながら僕はもう一度右手に少しだけ力を入れた。

第8話 予兆

有「ふう……つと、あれ？」

昼休みもそろそろ終わろうかという時間。思いがけず西木野と話し込んでしまった僕が教室に戻ると、高坂が沈鬱な顔をして何か考え込むように外を眺めていた。

有「高坂？」

穂「……………」

呼びかけてみるも返事はない。ただの屍のようだ。

有「おい。高坂ー？ホノカチャンー？」

もちろんそんな訳がないのもう一度呼びかけてみるが気づいた気配はない。相当深く考え込んでいるらしい。

海「考え込むと人の話が全く聞こえなくなってしまうんですよ。」

どうにか喋らせようと顔の前で手を振ったりしていると、こちらもどことなく表情の暗い園田が反応してくれた。

有「海未ちゃん。何かあったのか？」

海「なっ……！あなた、またそういうことを……！」

ホノカチヤンの流れを引つ張ってしまっただけなのだが、こうかはばつぐんのようです。二回目だというのにさつきまで暗かった園田の表情がみるみる赤くなっていく。

相変わらずコイツの表情はコロコロ変わって面白いなあと眺めていると、横から南が助け舟を出してくれた。

南「実は、さつき歌が上手だっていう1年生の子に作曲お願いしてみたんだけど…。」
南にも思うところがあるのか、いつもの甘い声も少し低い。

有「ん、ああ。西木野な。」

さつき聞いたばかりの歌とピアノを思い出しながら言う。どうやらコイツらと僕は入れ違いだったみたいだな。

南は一瞬ポカンとしていたが、すぐに再起動して僕に詰め寄ってきた。

こ「お、乙坂くん知り合いなの…!？」

有「ん？ああ。ちよつとな」

こ「……………」

答えると、南はしばらく黙っていたが、やがて

こ「……………ふうふうふうくん。」

「というかなり長めの反応をしてくださいました。」

有「ん？。どうかしたのか？」

聞いてみても、「べっつつつつつにい？」としか言わない南。少し気になったので、とりあえずもう一度聞いてみようとしてと一歩踏み出したところで、もはや馴染みつつある冷気が背後から漂ってきた。

海「……乙坂くんは本当に女の子と仲良くなるのが早いですねえ。これは少し教育的指導が必要です。」

ちなみに慣れてきているのは恐怖や苦痛だけだ。

有「い、いや、仲良くしてるって言っても、軽く話したぐらいで…僕が名前で呼んだり…あ！ポエム読んだりするのはせいぜいお前くら——海「乙坂くん、少し寝てていいですよ♪」

直後、僕の鳩尾に正拳突きが突き刺さった。

* * * *

海「おはようございます。乙坂くん。よく眠れましたか？」

放課後のチャイムと同時に目を覚ます。そこにはまるでこの時間に目覚めることが分かつていたかのように園田と南が立っていた。

有「ああ。……高坂は？」

聞くと、園田が窓の外を眺める。視線を追ってみると、そこには中庭に座る高坂。表情は変わらず暗いままだ。

有「まだなんか落ち込んでんのかよ……」

こ「穂乃果ちゃん自分がやると決めたことにはマジメだからね。」

クスクスと笑いながら、でもどこか暗い表情を浮かべる南。

有「……何があつたんだ？作曲を断られたからつてだけじゃないだろ？」

猪突猛進を絵に描いたようなあいつが、協力を断られたぐらいであれだけ考え込むというの考えられない。僕が聞くと、南は苦い表情をして頷いた。

こ「……うん。確かに作曲は断られちゃったけど、そっちはここまで落ち込む程じゃな

かった。むしろ問題はその後：西木野さんが去った後、私達の所に生徒会長がやってきて。」

有「またあの生徒会長か…。イチヤモンでもつけられたのか？」

僕が聞くと園田はゆっくりと首を振った。

海「いいえ。正しい、現実的な問題です。スクールアイドルという今人気の、話題性のあるものに何の計画も手を出して、もし失敗したら世間はと思うか、と言われました。」

有「……」

僕の反応がないのをその意見の肯定だと思ったのか、自虐的な笑みを浮かべる園田。

海「当然なんです。生徒会長が私達みたいな何の取り柄もない普通の高校生、曲もない、グループ名も決まっていなような計画性のない人達に学校の名前を背負わせたくな

いと考えるのは。」

そう話す表情は暗く、顔は限界まで俯けられている。

南も同じように顔を下げ、唇をかんでいる。

海・こ「「え？」」

だから、彼女達は触れるまで僕が彼女達の頭に手を置いたのに気づかなかった。僕はその頭をなでながらゆっくりと話す。

有「…それは違う。確かに、お前達は計画性がないかもしれない。物事を楽観的に捉

えすぎていたかもしれない。でも、それでいいと思うんだ。」

海「でも、廃校が……。学校のために私たちは…。」

有「確かにそうだ。でも、それだけでやってる訳じゃないだろう？自分達がやりたくてやっている。だからあのキツイ練習も毎日しつかりこなしている。衣装や歌詞、曲や振り付けに真剣に悩んでいる。」

確かに足りないところはある。けどコイツらは適当にやってる訳じゃない。真剣にやってるからこそ足りない部分が見えて悩んでいるだけだ。そうじゃなかったらここまで悩んだりしない。

海・こ「……。」

有「悪いことをしている訳でもない。ズルをしている訳でもない。なら、お前らが周

りを気にする必要はないんだよ。生徒会長も廃校も気にすんな。お前らはやりたいことを一生懸命やればいいんだ。」

昨日の理事長の話を思い出しながら言う。

有「なあ、園田、南。お前達は何がやりたい？」

冗談めかした口調で聞くと、ようやく2人はいつもの笑顔を浮かべた。

海「そうですね…私は、アイドルがやりたいです！穂乃果とことりと一緒に！」

今朝まであれだけ恥ずかしくていたクセに、堂々とアイドル宣言をする園田に僕と南は思わず吹き出してしまう。

こ「…うん！そうだね。私もやりたい！海未ちゃんと穂乃果ちゃんとキラキラした衣

装を着て精一杯楽しみたい！」

ひとしきり笑った後にそう宣言する南に、「はい！」と元気よく返事をする園田。もう心配無さそうだな。

海「それでも！ことり。スカート丈は膝下ですからね？」

こ「あ、あはー。それはちよつと……どうだろー？みたいな？」

海「ことりい!？」

……まだまだ問題は山積みのようなのだ。

有「まあ、何はともあれ、やることは決めたんだ。行ってこいよ2人とも。」

僕がそう言うと、二人は元気よく頷いた。

海 「はい！行ってきます、有宇！」

こ 「うん！ありがとね！ゆうくん！」

有 「へ？あ、ああ。」

今なんか違ったような……？何となく大事なことのような気がしたが、直後に募集していたグループ名候補b o xに紙が入ってたらしく、あれだけ落ち込んでいたクセに「やったー！！！」と教室に飛び込んできた高坂のせいでうやむやになってしまい、結局聞くことはできなかつた。

* * * *

有 「で？なんだよグループ名って。てかこっちはあれだけ頑張つてヤル気にさせたつてのに肝心のお前は紙切れ一枚で元気になるってどういうことだよ。もうちよつと落ち込んでけよ。その計画性のなさとか勢いで他人を巻き込むところとか。」

穂「なんか理不尽!?!」

いや事実なんだし理不尽ではねえだろ。八つ当たりだけど。まあ本当に落ち込まれて能力が発動されても困るので切り上げて話を進めることにした。

有「で、なんて書いてあったんだ?」

穂「まだ見てないよ?」

有「見てないのにあそこまで喜んでたのか…。」

すげえ才能だな…。イタズラだったらどうすんだよ。

穂「だってみんなでみたいし!じゃ、開けるよー。じゃじゃーん!」

みんなで見たいとか言っというて自分にしか見えない方向に紙を開く高坂。のぞき込

んでみると幸い白紙のイタズラということも無くその紙には流れるような文字で「μ s」と書かれていた。

有「……。」

……なんて読むんだろう？

穂「えつと……ひゅ、ヒューズ？」

海「ミュージズ、ですよ。」

有「石鹸か！」

海「違います。」

園田が呆れた目でこちらを見てくる。

海「おそらく、神話に登場する女神からとったものかと。」

さすが、中学生の時ポエムを書いていただけあつて詳しい……じゃなくて博識の園田さんだった。怖いから睨むのをやめてください。なんで僕の考えてることがわかるんだよ……。

こ「いいと思う！私は、好きだな。」

南がそう言い、園田と僕も頷く。高坂は「ミュージズ……」と呟きながら紙を見続けていたが、やがて大きく頷いた。

穂「うん！今日から私達は「μ s」だ！」

その手紙を綺麗に折り直した高坂は僕の方を向く。

穂「そうと決まればもう一回西木野さんに作曲頼んでこなくちゃ！行こ！ゆうくん

！」

有「流れるように人を巻き込む腕を引つ張るなそのまま走るな！分かった行くから離せ！制服が伸びる腕がもげる！園田、南！お前らは先に屋上行っててくれ！」

引つ張ることをやめない高坂に文句を言いながら、僕達2人は1年生の教室へと向かった。

* * * *

有「誰もいないな……。」

穂「あちやー、やつぱり遅かったかー……。」

結局最後まで高坂に引つ張られながら向かうと、教室には誰もいなかった。

？「どうしたにやん？」

しょうがないから帰ろう、と言おうとしたところで背後から声がかかる。振り向くとそこにはオレンジの髪をしたショートヘアの女の子が立っていた。というかじゃんつてなんだよ可愛いな。語尾猫ちゃんと名づけよう。

穂「ねえあの子は？」

猫「あの子？」

僕と違いにやんを気にすることなく会話を続ける高坂。でもあの子じゃちよつと伝わらないんじゃないかなー。

？「西木野さん、ですよ。西木野…真姫ちゃん」

助け舟を出そうとしたところで少女の後ろからそれに答える声があつた。よく見てみると、語尾猫ちゃんの後ろにもう一人美少女が立っていた。高坂くらいの長さの茶髪。柔らかそうな肌は真つ白で、かけている赤いメガネがよく似合っている。ていうかメガネっ子かよ可愛いな。メガネっ子ちゃんと名づけよう

メ「ふえっ？えっ、えつと…。」

有「…………？」

何故か急に顔を真っ赤にして俯く少女。まさか今朝の南のようにまた声に出してしまったかと身構えるが、同じく不思議そうな顔をしている高坂を見る限りそういう訳では無いらしい。どうしたんだろう？

有「あの…「音楽室じゃないですか？」」

具合でも悪いのかと尋ねようとした所に語尾猫ちゃんが割って入ってきた。彼女はそのまま友達を隠すかのように僕達の前に立って続ける。

猫「あの子、誰とも話さないし。休み時間はいつも図書室で、放課後になると音楽室に行っちゃうんです。」

穂「へえ…。」

強引な話の切り方を不審に思いながらも相槌をうつ高坂。ていうか西木野さん、友達

いないんですね…。まああの性格じゃあ無理もないけど。

有「そっか、じゃあ行ってみるよ。」

高坂に目配せをして歩き出す。すると背中からメガネっ子ちゃんの声がかかった。

メ「あ、あの！」

話したくないのかと思っていたので意外に思いながら振り向く。少女は知らない人と話すことが得意ではないのだろう、不安そうに、しかししっかりと聞こえる声で言った。

メ「あの、頑張ってください…アイドル。」

その真っ直ぐな応援に、僕たちは思わず顔を見合わせ、それぞれ誠実な答えを返した。

穂「うん！頑張る！」

有「ああ！ありがとうございます！」

その気持ちが伝わった——わけでもないのだろうが、僕らの姿が見えなくなるまでメガネっ子ちゃんやんは小さく手を振り続けてくれていた。

有「ん？」

穂「どうしたのゆうくん？」

メガネっ子ちゃんやんや語尾猫ちゃんとかわかれた後、音楽室へ向かうため高坂と階段を駆け上がった僕はポケットに違和感を覚えてブレーキをかける。急に立ち止まったので、2段上で高坂が不思議そうな顔で見下ろしてきた。

有「つと、悪い。メールだ。ちよつと先いっててくれ。」

僕が普段メールをする相手など限られている。なんなら僕のメールアドレスを知つ

てる相手も限られている。十中八九高城だろうが、もしかしたら歩未かもしれないのでとりあえず誰からかだけでも確認しようと高坂に先に行ってもらって携帯を開く。

〔From友利〕

《乙坂くん、今すぐ生徒会室に来てください》

* * * *

友「遅いぞ変態シスコン土下座男。」

有「それがメール一本で忠犬よろしく駆けつけた人間への台詞か？」

というかソイツは人間か？

友利からメール直後、高坂に急用が出来たという旨のメールを送った僕は2日ぶりの校舎、そして生徒会室へとやって来た。部屋には高城と黒羽、それに友利いつものメンバーが勢ぞろいだ。

友「それじゃあ年上巫女萌え野郎も来たことですし話しますか。」

有「お前はなにをどこまで知ってるんだ…?」

コイツちゃんと学校行ってるんだろうか。友利は僕のツツコミを無視して扉の方へと目を向けた。

友「入って来てくださーい。」

? 「はい……。」

弱々しい返事とともに扉が開かれる。俯きながら入ってきたのは気弱そうな1人の少女だった。華奢な体の腰まで伸びたストレートな黒髪、長めの前髪と俯き気味なせい

で表情はあまり見えないがそれでも分かるくらい整った顔立ちをしている――

友「……だからそうやって女子が出てくる度に細かい描写を加えんでいい!」

有「痛え!」

友利に思いつきり足を蹴られる。どうやらコイツも僕の考えてることがわかるクチらしい。ホントなんだその特殊能力。

有「そ、それでこの子が何なんだよ……?」

蹴られた足をさすりながら話をすすめる。友利は一度頷くと真剣な表情を取り戻してから言った。

友「彼女の名前は中村立花さんと言います。昨日能力が目覚めたウチの生徒です。その能力は……能力消去。」

有「の、能力消去!？」

友「ええ。その名の通り、他人の能力を削除する能力です。」

いや、しれつと言うけどさあ…。

有「すげえな…そんな能力ありかよ。」

僕が言うと友利が呆れたような顔を向けてくる。

友「いやあなた程ではないと思いますが…。それに、強力だけあってこの能力には厳しい制限があるようです。」

有「制限?」

友「ええ。一つは対象の手を握ること。もう一つは対象者が能力を得たのが最近である…：恐らく1日以内程度である事だと考えられます。」

有「1日…。」

つまり能力が発生した直後なら消せるってことか。本当にすごい能力だな。確かに能力を奪える略奪ほどでは無いのだろうが、それでも他人の能力に直接干渉できる能力は初めてだ。それに僕達にとってはある意味では略奪よりも使い勝手が良いだろう。能力を消すことが出来るなら僕と違って余計な負担を背負わずにすむし。

有「話は分かった。でもそれを僕に話してどうしようって言うんだ？」

友「…。」

友利は1度だけこちらに視線を向けたが、やがて諦めたように話し始めた。

友「ここから先は可能性の話ですが…。この能力は対象者が発動してから1日の能力を消すことができる能力です。」

有「ああ。だから？」

友「ちつ、少しは自分で考えるよ…。対象者の1日、つまりあなたが奪った能力でも1日以内なら消せるかもしれないって事です。」

有「……。」

そうなる…のか？ 確かに対象者からの1日なら僕の中の1日と数えることもできる。得た能力をかたつぱしから消すこともできるかもしれない。

友「もちろん可能性の話です。消したからといって脳の負担が消えるとも限りません。ですが能力を持ち続けるよりはマシっしょ。」

ようするに、と友利が一度言葉を区切って続ける。

友「もし万が一あなたが略奪の能力を使わざるを得ない状況に陥った時、使ったあとすぐに私たちを呼んでください。上手くいくかは分かりませんが、能力消去をあなたに

使ってみましょう。」

有「…なるほどな。」

つまり高坂の監視に失敗した時の保険か。もし高坂が絶望し、能力を発動した時、つまり僕が略奪でその能力を奪ったあとにその能力を消せるかもしれないってわけだ。

有「確かに、脳の負担うんぬんを差し引いても崩壊っていう能力を消すことが出来るってのは大きなメリツトだな。」

僕がそう言うと、友利はそれだけじゃないという風に首を振った。

友「それもありますが…実はここ最近神田から秋葉原周辺で多くの能力者が目覚めてるんです。」

有「ああ…そう言えばそうだな。」

友「もちろん微々たる数です。1ヶ月に2, 3人…それでも、他の地域と比べると明らかに多い。もしかしたら、あなたの前に能力者が現れることもあるかもしれません。」

有「ん……？」

何か頭引つかかったような気がしたが、まとめるように話し始める友利の声に思考が遮られ、それが形になることは無かった。

友「言つとくけど略奪を無闇に使つていいつて言つてるわけじゃないっすよ？あらかゆる力は相応の理由がある。それを無理やり剥ぎ取る略奪がいい影響を与えるはずがない…あくまで万が一そうせざるを得ない状況の時のみです。いいっすね？」

有「あ、ああ。分かったよ…。」

何か大事なことを忘れていて、そんな感覚をもったままの僕は詰め寄ってくる友利に曖昧な返事を返した——

第9話 訪問

穂「ゆうーくーくーくーん！」

有「ぐがッ!？」

新しい能力者「能力消去」こと中村立花との会合、そして友利からの新たな忠告を受けた次の日、僕が学校にやって来ると、高坂が朝一番の肘鉄を鳩尾に決めてきた。避けるどころか防御するのすら間に合わなかった。コイツ……なんて早さだ……っ!?

有「……で？何の用なんだよ？」

一瞬で立ち直った僕に驚いたような呆れたような声がかかる。

海「有宇は痛みに強すぎませんか……?？」

普通鳩尾に肘鉄がはいったらまともに喋れないんですけどねえと首を傾げる園田。経験者のセリフだ…。

有「痛みの耐性はついてるからな。」

何たって前の学校にはこつちが完全に無防備な状態から容赦なく脳天に蹴り入れてくる生徒会長がいたからな。それに比べれば肘鉄など物の数ではない。

海「それはそれは…コレなら楽しめそうですね。最近体もなまり気味でしたし…。」

会話を続けると危険だと第六感が告げていたので、ベ〇ータみたいな事言い出した悪魔はスルーし、この場で一番話が通じる奴に聞くことにした。

有「それで？今回は何があつたんだ？」

こ「実はねえ。曲が完成したの。」

有「お！マジでか。」

穂「あーっ！ことりちゃん！私が言いたかったのに！」

さすがバカすぎる高坂や、会話の度に心身削られていく園田と違って南はすぐに質問に答えてくれた。昨日何やら様子がおかしかったのは気のせいだったようだ。声聞くだけで癒されるしこれからは南との会話だけで話進めたいなあ…。

有「ん？つてことは作ったのは…」

こ「うん！本人はそうとは言わなかったけどきつと西木野さんだよ。」

やっぱりそうか。でも昨日は僕が友利に呼ばれて帰っちゃったつてのに…。

有「凄いな高坂。まさかお前が話し合いで他の人間を説得できるとは思わなかったぞ。」

穂「バカにしすぎかつ！…まあでも説得って感じじゃなかったかも。」

有「ん？」

穂「あまり意味なさそうだったから。歌詞渡して最後に1回だけ考えてください！つてお願いしてきたんだだけ。あー、あと腕立て伏せとかやってもらったかな。」

海「よく書いてくれましたね…。」

呆れたような園田。同感だけどあの子書く気満々だったからな…。キツカケさえあれば書くだらう。そのキツカケをコイツが与えられたってのはやっぱり意外だが。

有「それで？どんな曲だったんだ？」

穂「まだ聞いてない！」

有「あ、そう……。」

コイツのまだ分かってない結果に対してここまで喜べるのは才能だと思う。

穂「うーん、それもない訳じゃないけどさ、真姫ちゃんが書いてくれた曲だもん！いいに決まってるよ！」

有「…。」

ニコニコ笑いながら言う高坂に思わず苦笑する。…なるほど説得できた訳だ。

有「そうだな。じゃあ今から…は無理か。放課後にみんなで聴かせてもらうか。」

穂「うん！」

* * * *

放課後。いつもなら真つ先に着替えて練習をし始める高坂たちの練習指導、という名のヤジをいれている頃だが今日は僕はもちろん彼女達も誰も着替えておらず、屋上でパソコンを開いていた。

穂「それじゃあ入れるよ！」

高坂が緊張した手つきでCDを取り出し、パソコンに入れる。するとすぐに昨日も聞いた綺麗なピアノが、そして透き通っているが力強く響く声が流れてきた。

穂「……この歌声！」

こ「すごい……！歌になってる……。」

海「私たちの……歌。」

聴きながら3人がそれぞれの感想を呟いていたが、正直それらはほとんど僕の耳に入ってこなかった。

コイツらの曲もそうだが、歌詞を聞くのも初めてだ。僕はパソコンから流れてくる美しいメロディーに完全に聞き入っていた。

有「……。」

真つ先に評価されるのは、やはり曲の完成度の高さだろう。まったく聴いたことがないと言っていたアイドルの曲を、しかもこれだけ短い期間でここまで仕上げてきた西木野には恐れ入る。

しかしそれと同じくらい、聴こえてくる歌詞は魅力的だった。相変わらずパソコンにのめり込んでいる後ろ姿の一つををチラリと見やる。曲名は、S T A R T : D A S H !! “。まさに始まりといった風のその曲の歌詞は1曲目らしい初々しさと、絶対にやるんだという強い意志を素朴な、しかし力強い言葉で綴られていた。

…初めての作詞、しかも曲もなしに素人が書いたものだとは到底思えない。もしかしたら才能は西木野以上かもしれないな。

全「……。」

やがて最後の伴奏も終了し、曲が終わっても暫く誰も喋ろうとしなかった。南がゆつくりとした動作でCDを閉まいながら思わず、といったようにぼやく。

南「すごい…。」

海「ええ…これを私達が歌うことができるなんて…。」

それに続いて園田も自らの感想を口にする。これは僕も言う流れかなと口を開いた所ですつと口を開けたまま固まっていた高坂が南からCDケースをひったくるとそれを持ったまま叫びだした。

穂「すごい！すごい！すごい！ほんとに凄いよ！これを私たちが歌えるなんて夢みたい！」

高坂は立ち上がるとそのまますごいと叫びながら屋上の上をクルクルと踊りだす。あ、バカ、急に立ってそんなに動くか——と言おうとした所で、

穂「あつ。」

——予想通り高坂が派手にバランスを崩して床に顔から

突っ込む。持ち前の運動神経でなんとか直撃は避けたものの、CDケースは手から離

れ、不運なことにそのケースからCDが飛び出していて――

「「あっ」」

という声の揃った園田、僕、南の声。直後に続いたパキツというささやかな破壊音は、昼過ぎの屋上にやけに響いた。

* * * * *

有「うつわ、デケー…。」

三十分後、僕は西木野総合病院の裏に構える大豪邸、つまり西木野の自宅の前に立っていた。目的はもちろん割れてしまったCDをもう一度貫いに行くためだ。「お願い！ 私たちは練習があるからどうにか説得してきて！」というアホサイドポニーの顔にデコピンを食らわせつつも断りきれなかった僕は、1人であるツンデレ小娘を説得するために理事長から聞き出した彼女の自宅にやって来たのである。

有「しっかしどーすっかな。」

よく考えると南の話を聞く限りあいつは自分が作ったことを認めていないわけ
で：そんな奴に作り直しをお願いするとかどう考えても無理ゲーなんですけど。

? 「あらあら?」

家の前でウンウン唸っていると、ドアが開いて西木野のお姉さん?らしき妙齢の女性が
顔を覗かせた。あの美少女と負けず劣らずの美形を輝かせながらこちらに詰め寄つて
くる。

? 「あらあら? あらあらあらあら?」

有「ええ!」

ヤバイ、通報される：!と思つて身構えると、西木野姉(?)は僕の手をとるとその
まま家の中へと招き入れた。リビングルームらしい部屋に通され、あれよあれよという
間にお茶菓子と紅茶を用意される。

真姉(？)「ささ、どーぞ！急なものだからあまりおもてなしも出来ないけど！」

有「え、えーつと…。」

いやゴ○イバのチョコレートとかあるんですけど…。急な展開と総額いくらするのかわからないお菓子の入ったバスケットに震えていると、そんな僕に構わずテンションの高い西木野さんがペラペラと話し始めた。

真姉(？)「でも真姫ちゃんがお友達連れてくるなんていつ以来かしら？もー誰も家に連れてこないし家に帰ってくる時間もいつも決まっているしもしかしてお友達出来ないのかと思ったらまさかいきなり男の子を呼ぶなんてビックリしちゃった！あ、もしかしてお友達じゃなくて彼氏さんだったりする？」

有「ち、違いますよ！」

真姉(？)「まー照れちゃって。カワイイ♪」

クスリと小悪魔っぽく微笑む西木野さん。超絶美人のお姉さんに弄られるという全男子共通の願いの一つを図らずも達成した僕は今更ながら自己紹介をしようと口を開いた。

有「…僕は乙坂有宇と言います。一昨日音ノ木坂学院に転校してきた新入生で——」

——西木野との関係をなんて言おう、と思った所で都合よく、または最悪のタイミングでリビングのドアが開き、シャワーあがりらしい西木野がバスローブ姿で登場した。

真「ママったらさつきから何を騒いでるの？つて…」

一瞬、時が止まった。誰一人言葉を発することも出来ない状況で僕の目と脳だけは今見える光景の全てを捉え、記憶しようと目まぐるしく動き続ける。

バスローブ、それも上1枚という the 富裕層みたいな彼女の格好からは綺麗な鎖骨が覗いて見え、僕は紳士協定に基づき直視しないよう目線を下げる。すると普段のスカーとほとんど変わらない長さのはずなのに艶めかしささえ感じる生脚が目に入っ
てしまい、僕は全意志力を振り絞って目線をあげた。

真「なっ、アンタ、なっ…。」

僕が鋼の自制心で欲と闘っている間ずっと意味不明な単語を言い続けていた西木野だったが、僕と視線が合うと引きつった笑みらしきものを浮かべていた口元が引き結ばれ、首元から一気に真っ赤に染まる。西木野は真っ赤になった顔を下げカツカツとこちらまで歩み寄ってくる、耳元で屋敷に響き渡る大声で——

真「なんでここにいるのよー!!!」

その声に一瞬遅れて、バチーンという音が屋敷の隅まで響いた。

* * *

真「で？何しに来たのよ？こんな所に！わざわざ！」

真姉（？）「もう。そんなに怒らないの。乙坂くん何も悪くないでしょー？」

5分後、僕はようやく西木野と対面した。西木野は西木野（姉？）さんが彼女を宥めながらが用意してくれた紅茶をすすりながらもブツブツ文句を言い続ける。どうやらまだお怒りのようだ。

真「大体ママが教えてくれれば良かったじゃない！」

ちなみに今彼女は制服に着替えてきている。

真姉（？）「え？？だってお母さんだつて乙坂くと話したかつたんだもん♪」

有「あ、あの。さつきから気になってんだけど…。」

怒りが冷めないのか、まだ若干顔の赤い西木野の方を見ながら、先程から彼女の相手をしている見た目二十代前半といった風の女性を指さす。

有「えつと…こちらの方はもしかして…。」

真「…? だからママよ。ママ。」

有「ははは。またまたご冗談を。ジョークきつつかいだもんな西木野さん…:え?マジで?。」

コクコクと頷く西木野。冗談でしょ?というように横の妙齡の女性に目を向けるとニコツと花が咲いたような笑顔を浮かべて自己紹介した。

真姉(?)「どーも、西木野真姫の母です♪いつも娘がお世話になっております。」

……はい？

有「……え？お母様？西木野の？血の繋がった？」

コクコクと頷く西木野&西木野母。……み、見えねええええええええええ!!! 二十代だろどう見ても!?理事長も凄かったけどこの人もとんでもねえな!!

有「お、お若いですね。」

真マ「やだー。そう見える？」

有「そう見える、とういうより全く高校生の娘を持つ母親に見えないんですが…。」

初めてお世辞じゃなく使ったよ、「お若いですね」。

真マ「えー？もうお上手なんだから!。」

満更でもなさそうな西木野さんだった。

真マ「よく見たら若い頃の主人にそっくり♪ホント真姫ちゃんいい男連れてきたわね！こんな彼女ならお母さん大歓迎♪」

真「ちよっ…だからそんなじゃないってばー！」

西木野姉…じゃなくて西木野（母）さんの弄りはこの後十分ほど続いた。

真「それで？何しに来たのよ？」

西木野さんの弄りから逃れた西木野はようやく話題をもとに戻してくれた。

有「あ、ああ。実は…。」

言いながらCDケースを取り出すと西木野の前に出す。

有「スマン、高坂が曲聴いた途端感動しすぎてCD割っちゃまって…。もう一度貰いに来たんだ。」

西木野はCDを受け取りながらホツとしたように答える。

真「なーんだ、それくらいならお安い御用…じゃなくて！私が作ったものじゃないんだから作れるわけないでしょ！」

有「いやそんなの声聞けばー発だから…。」

ほら来たよツンデレ。めんどくせえなこれ説得するの…。

真「そ、そんなものたまたま声が似ているだけかもしれないでしょ！」

ふん！と音が聞こえそうなほど顔を背ける西木野。どうやっても認めねえ気だなコイツ。それならコツチにも考えがあるぜ。

有「あー、そっかーこれ作ったの西木野じゃないのかー。意外だなー。」

真「……？」

急に独り言を言ってきた僕に訝しむように目をむけてくる西木野に構うことなく続ける。

有「あんな素晴らしい曲書けるの西木野だけだと思ったんだけどなー。感動したなー。あの天使かと思つた綺麗な歌声も別の人だったのかー。誰なんだろうなー。」

真「私よ！」

有「……。」

……チヨロすぎた。西木野は（しまったー!!）みたいな顔をして固まっている。こいつも実はアホの子なんじゃないの？

真「う…そ、そうよ！私が作ったのよ！」

有「え！マジで？やっぱり西木野だったの!？」

開き直る西木野と驚く（振りをする）僕。この辺は要らないかもしれないけどまあ気分の問題だ。

有「じゃ、じゃあもう一度CDをくれないか!？」

CDを渡しながらお願いすると西木野は複雑な表情ながらも頷いた。

真「わ、分かったわよ！作るけど！作るけどその代わりあの子達には内緒だからね！」

有「あ、ああ。」

頷く僕。もうバレっバレだけどな…。西木野は満足したのか、ふう、と一つため息をつくと話題を変えた。

真「まあでもちようど良かったわ。私貴方に聞きたいことがあったのよね。」

有「ん？好きな女性のタイプなら——はい違いますよねごめんなさい。」

混ぜつかえそうとした僕をひと睨みで黙らせると、西木野は表情を真剣なソレにして聞いてきた。

真「あなた、どうしてあの人達の、*μ* sの手伝いをしているの？」

有「∴。」

真「だってそうでしょ？転校して2日のあなたが音ノ木坂学院の廃校を阻止するなんてことに必死になれるとはどうしても思えない。何か他に理由があるんじゃないの？」

心底不思議そうに聞いてくる西木野。どうして、か∴。確かに、僕には音ノ木坂学院の廃校を止めたいなんていう強い意志はない。僕があいつらという理由はあくまで高

坂の崩壊の能力のストッパーとして、彼女のそばにいる方が都合がいいだけだ。…でもそれを伝えるわけにはいかない。もし高坂の能力が周りに知れ渡ってしまったら彼女は学校にはいられなくなる。恐らく専用の隔離施設に移され、能力を抑えられる、例えば僕のような人間でない限り会うことすら出来なくなってしまうだろう。

あいつの為にも絶対にここで悟らせるわけにはいかない。僕が慎重に言うべき言葉を探していると、西木野が何故か不安そうに質問を重ねてきた。

真「もしかして…あの人達の中に好きな人がいるの？」

有「いやいやないよ？」

真「へ、へえ…」

西木野は即答に驚いたのか一瞬目を丸くしたが、一転して上機嫌な表情で語りかけてくる。

真「でも好きな人でもないのに言えないってことはやっぱり下心があるんじゃないの？土下座魔の女好きな乙坂先輩？」

有「なっ…!? てめえ西木野さんの前で変な事言うんじやねえ!」

勘違いされたらどうする! いやほとんど事実だけど!

真「だつて昨日だつて東條先輩に手を出そうとしてたじやない。」

有「誤解だ! 大体なんでお前までそのことを知っている!?!」

さてはこいつ朝練も見に来てたな!?! どうりで全然掃除してない東條先輩がちよこちよここと忙しそうだったわけだ!

有「お、お前だつて学校に友達いないんだろ! 語尾猫ちゃんが言つてたぞ!」

真「なっ…!?! だ、誰よ語尾猫ちゃんつて!?!」

有「誰でもいいだろ! 言つてたぞ! 休み時間も放課後も音楽室ばっか行つて誰とも話さないつて!」

真「う、うるさいわね! 私にはピアノが好きなのよ! 大体、転校初日に自己紹介して土

下座する人よりマシよ！あの人達以外の女子は誰も近寄つて来ないくせに！」

有「何だと！」

真「何よ！」

バチバチと火花が出る勢いで睨み合う僕達を見て、西木野さんが紅茶を飲みながら
たった一言――

真マ「あらあら。2人とも仲いいわね。」

有・真「「どっこが!?!」」

僕と西木野、2人のツツコミが初めて合った瞬間だった。∴結局この後僕は夜遅くなるまで西木野と口論をし続けてしまい、ノリノリの西木野さんに勧められて夕飯まで頂いてしまった。……フルコース料理って別に家でも食べられるんだな。

* * *

真マ「…ありがとね。乙坂くん。」

有「え？何がですか？」

帰るために靴を履いていると急に大人の笑顔でお礼を言われてしまいあっさり狼狽える僕。ちなみに西木野はとつくに部屋に戻ってしまっている。僕一応学校の先輩だぞおい。

真マ「あの子…普段は私たち相手でも長く話したりしないのよ。あの子のあんなに楽しそうな顔、久しぶりに見たわ。」

有「…はあ。」

つまりあれか、あいつは普段ないほど長々と僕と喧嘩してたわけか。

真マ「それにあの子に曲作りをお願いしてくれたことも。…あの子は昔からピアノが大好きだったの。でもこの家に跡継ぎとして生まれたあの子は自分がピアノニストになることは出来ないって分かってしまった…それからあの子、家では全くピアノに触らないようになってしまったの。」

有「…え？」

「初めて会った時の西木野を思い出す。あいつは誰よりもキレイにピアノを弾いていて、何よりも楽しそうに歌っていて——

真マ「多分私たちに気を遣わせないようにしたんでしょう。…だから、この前あの子がピアノを弾いているのをみて本当にビックリした。あれもあなたのおかげ…。」

有「…それをしたのは僕じゃありませんよ。それに、ピアノを弾くことを決めたのも楽しそうに話しているのも全部アイツが考えてやった事です。僕のおかげじゃない。」

不当に褒められているような気がして思わず突き放すように言ったが、西木野さんは

気にもとめなかった。僕の目をまっすぐ見つめると、頭を深く下げながら言う。

真「それでも、ありがとう。そしてあの子の事、よろしくお願いします。」

有「…美人の頼みじゃ断れませんね。」

真マ「あらありがとう♪」

苦し紛れにそう言うと、西木野さんは最初と同じように小悪魔っぽく微笑んだ。その笑みを浮かべたまま、扉の開けた僕に最後の別れの言葉をかける。

真マ「それじゃあ乙坂くん。またいつでも遊びにいらつしやい♪真姫がいる時でも…
いなくて2人きりの時でも、いつでも歓迎するわよ♪」

有「なっ…!よ、夜遅くまで失礼しました!」

美人のお姉さんにウインクと共にそう言われてしまえば、健全な男子高校生としては

反応せざるを得ない。僕は慌ててドアを閉めると、赤くなっているであろう顔を手で隠すようにしながら家の敷地外へと出た。

有「……。」

最後に豪邸をよく見て帰ろうと振り返ると中から綺麗なピアノの音が流れてくる。

有「……ま、美人の頼みなら断れないよな。」

明日語尾猫ちゃんにでも彼女のことを頼んでみよう。そう思いながら僕はゆつくりと帰路についた。

第10話

真意

真「ん！」

西木野家へお邪魔した次の日の昼休み。僕はまた西木野のピアノを聴きに音楽室へやって来ていた。相変わらぬの見事なピアノに耳を傾けながら乙坂家ビザソースサンドイツチ（体感的にはさつき自販機で買ってきたいちごオレより甘い）をむぐむぐやっている、西木野は急にピアノを弾いていた手を止め、僕に何やら透明なCDケースを渡してきた。

有「…何だこれ？」

聞くと、西木野は呆れたような顔で言う。

真「昨日頼んできたでしょ！曲よ！曲よ！曲よ！」

有「あ、ああ。そうか曲か。」

そう言えば元々CDを作り直して貰いに行ったんだった。僕はあわててそのケースを受け取る。

有「ありがとう。助かったよ。」

真「べ、別にもつかいやるくらい大した手間じゃないし…て、ていうか約束は守りなさいよ!?作る代わりにあの人達に曲作ったのは私ってことは言わない!」

有「はいはい…。」

真「何よその返事! バレたら許さないんだからね!」

いや、バレバレなんだけどな…。もう相手するのもめんどくさいのでしぶしぶ頷く。有「分かったよ。絶対にあいつらには言わない。」

誓いをたてると満足そうに頷く西木野。よほどバレたくないらしいな…。

まあ僕はいつの事をあいつらに言わないとしか約束してない。絶対言わないぜ！
バレルかどうかはしらんけどな！などと汚い大人の思考をしていると、西木野が思い出したように聞いてきた。

真「そう言えば…アンタ昨日ママとなんか話した？」

有「なんかって？」

真「分からないけど…昨日アンタが帰ってからなんか妙に機嫌がいいのよね…。」

有「ふーん…。」

それは多分友達ができてないと思ってた娘が学校の同級生（実際は先輩）の僕を連れてきた（実際は勝手に訪ねただけ）と思ってるからだろうな…。僕自身もかなりもてなしてくれたしよっぽど娘が大事みたいだな。

そんな親心を知ってか知らずか、いや間違はなく知らないだろう西木野は、親子の情愛に微笑ましさと一抹の寂しさを感じている僕に、

真「…アンタまさか人の母親に手を出して無いでしょうね？」

とジト目で仰るのだった。

* * * * *

有「えーつと…ハロハロ限定版ストラップ、と。これで全部かな。」

放課後。僕は高坂たちの練習を軽く覗いたあと秋葉原にくり出していた。目的は歩未に頼まれたハロハロの秋葉原限定グッズを買うためである。どうせ学校にいるんだし本人に貰えば良いんじゃないかと思わなくもないが、歩未に言わせるとそこはやっぱリファンのこだわりとして自分の金で手に入れたらしい。と、言うわけで妹のためならタイムリープすらしてみせるがモットーのお兄ちゃんである所の僕は1人人生初の秋葉原巡りに出てきたのである。

練習を抜ける時に高坂が家がどうのまんじゅうがどうのと騒いでいたような気がするが…知らん!!!歩未のためなら同級生も仕事も平気で投げ出すお兄ちゃんだった。

有「ん？」

商品をもってレジに向かおうとしていたその時、見覚えのある顔のストラップを見つけて立ち止まる。見てみると先日歩未がテレビとともに熱弁していた大人気スクールアイドル、「A—R—I—S—E」のストラップが置かれていた。

有「スクールアイドルにグッズまであるのかよ…」

地元で人気のあるアイドルなんだし当然のことなのかもしれないが置かれている箱の中にあるストラップはラスト1個。物凄い人気だな…。

有「ふむ…どーするか。」

ストラップの前で一人呟く。どーするかとはもちろんこれを買うかどうかだ。別に歩未に頼まれている訳では無いが昨日あれだけ興奮していたんだ。持って帰れば喜ぶだろうことは目に見えている。……それに僕もちよつと興味あるし。

有「買っていくか。」

最近生徒会の手伝いで金も溜まってきている。友利もこっちの任務中も生活費は保障すると言っていたので問題はないだろう。僕は買うことが決定している数々のグッズにそれを加えるべく手を伸ばした——

「あ」

——というところで、お約束。誰かと同時に商品を掴んでしまったらしい。しかし、譲るわけにはいかない。こういう時は最初の印象がものを言う。歩未のために心を鬼にして睨みつけた目線の先には——

メ「あ、あのう…こんにちは。」

——戦意の欠片もない、どこるか食べられる直前の子猫みたいな表情で目に涙を溜めた美少女、メガネっ子ちゃんは今にも倒れそうに立っていた。

* * *

メ「あの…ありがとうございました。ホントに良かったんですか？」

有「構わないよ。元々それを買うために来たわけじゃないし。」

10分後、先輩スキルを発動させてストラップを譲った僕は、途中まで帰りが一緒らしいメガネっ子ちゃんとともに秋葉原街道を歩いていた。きらびやかな街並みをいつもより気持ち遅めを意識しながらメガネっ子ちゃんの1歩先を歩く。ちよこちよこことついてくる少女を横目で確認しながら僕は口を開いた。

有「アイドル、好きなんだ？」

花「は、はい…。」

緊張しているのか元からなのか、聞き取れるかどうかの声をだす少女。

まずは（多分睨みつけてしまったせいで）生まれた警戒を解いてもらわないと…。僕は笑顔をつくるとできるだけ気さくにみえるように話しかけた。

有「あ、えつと…そう言えば言つてなかったな。僕は乙坂有宇。音ノ木坂学院転校生

で2年生。」

少女は目をぱちくりさせると慌てて自己紹介を返してきた。

花「え、えつと小泉花陽。1年生です。」

有「小泉、か。この前はありがとう。お陰で西木野に会えたよ。」

花「い、いえ。教えたのは凜ちゃんですし…。」

有「凜ちゃん？」

花「あ、星空凜ちゃん。あの時一緒にいたショートカットの女の子です。」

有「ああ…。」

語尾猫ちゃんのことか。

有「星空に小泉ね。二人は仲いいの？」

花「はい！小さい頃からずっと一緒に：元気で明るくて自慢のお友達です！」

ぐつと拳を握って言う小泉に微笑ましきを感じて笑みをこぼす。見るからに活発そうな星空と話してるだけで周りをにこやかにする小泉。きつと二人はいいコンビなのだろう。

話しているうちに緊張も解けてきたのか、その後には口を開いたのは小泉だった。

花「乙坂先輩は、高坂先輩たちの：。」

有「ん？ああ：マネージャーみたいなものだよ。あいつらの基礎練の手伝いしたりダンス見て意見言ったり。」

実際はヤジを飛ばしているだけだが。

有「あ、それと先輩は付けなくていい。敬語も使わなくていいし。」

花「え？でも：。」

有「僕はちよつとした事情で2年生になってるけど歳は小泉と変わらないから。変に敬語使われるよりむしろ気が楽だ。」

小泉はそれでも迷っていたようだが、僕が「頼む」と言うのとコクンと頷いた。

花「えつと：じゃあ乙坂くん、は高坂先輩たちと、sのマネージャーって事なんだよ

ね？」

有「ああ。」

花「それで…なんで二人して西木野さんを探してたの？」

有「ああ…西木野には作曲をお願いしてたんだ。」

花「作曲？」

有「ああ。高坂がスクールアイドルをやるって決めた次の日…まあその時は僕はまだ転校してきても無かったんだけど、アイツが西木野の歌に惚れ込んだらしくてさ。」

花「高坂先輩が…。」

有「けどあいつ「アイドルとか興味ありません！」って感じだったらしくて毎日勧誘してたってわけだ。僕が来た後も。」

考えてみるとあんな面倒なのに何日も付きまとわれてたのか。西木野もたいへんだったな…。

花「へえ…。」

有「それで君達とこの前会った日、ようやく作曲のOKが貰えたってわけだ。勧誘は

残念ながらダメだったけどな。」

花「えっ?! 入部してもらえなかったの!？」

有「?う、うん。」

花「そ、そっか…。」

それつきり黙り込んでしまう小泉。西木野がアイドル部に入部しなかった事がそんなに意外だったのだろうか? あいつは別にアイドル好きって訳じゃなさそうだしむしろそういう派手な方にばかり目がゆきがちなものは苦手そうに見えるんだけど…。

しばらく会話なしに歩いてると、下を向いていた小泉が顔を真剣なそれにして言った。

花「乙坂くん、西木野さんのこと…もう1度だけ説得してみてくれない、かな?」

有「へ?」

花「何となく、なんだけど…西木野さんホントは音楽が、アイドルがやりたいと思うんだ。」

有「そう…かな? いやまあどっちにしろ説得は高坂が続けるんだらうけど…。」

喋りながら考える。

西木野が実はアイドルをやりたいがっている。と、いうのを僕が全く考えていなかった訳では無い。当たり前だ、あのツンデレの言葉をいちいちそのままの意味でとってたらキリがない。そもそも曲作りに協力をしてきている時点で今はアイドル活動を悪くは思っていないはずだ。

それに――

――『あの子、家では全くピアノに触らなくなってしまったの……』――

――それに、アイツが今自分でピアノを使って作曲しているこの状況を悪く思っているはずがない。元々今度隙をみて作曲だけでも続けてもらえるよう頼むつもりだった。が……。

有「もしかして……西木野からなにか聞いているの？」

花「う、うん……。ホントに、何となくなんだけど……。」

有「そ、そうか……。」

それにしちや結構力強く断言してた気がするけど……。まあ気のせいなのだろう。またはアイドル好きの勘か。とりあえず納得することにして僕は会話を交えることにした。

有「ありがとう。今度もう一度誘ってみるよ。……とところで西木野のことで相談がある

んだけど……」

花「？」

キョトンと首を傾げる小泉に向かって僕は両手を合わせ頼んだ。

有「知ってるだろうけど……西木野のヤツ、まだクラスで話せる友達がいなみたいでさ。小泉、アイツの友達になつてやつてくれないか？」

花「友達……」

有「うん。口は悪いけど根は悪いやつじゃないんだよ。多分。」

小泉はしばらく目を丸くしていたがやがてゆつくりと頷いた

花「分かり、ました。私も西木野さんともつとお話したいつて思つてたし……。1度凛ちゃんと話しかけてみたくんですけど上手くいなくて……。でも、もう1度、話してみる。」

有「そうか……。ありがとう。」

お礼を言いながらため息を吐くと、小泉がクスクス笑いながら言った。

花「随分優しいんだね。西木野さんに。」

有「——！」

瞬間。息が詰まり、歩いてきた足が止まってしまふ。急に立ち止まった事で怪訝そう

にこちらを見る小泉に僕はどうにか笑みを返しながら言った。

有「…別に。何となく、だよ。」

一瞬窺うようにこちらを見てきた小泉だったが、僕が笑顔を見せると不思議そうながらも頷いた。

花「?そつか。」

有「ああ。」

そう答える僕の声は、言つてて思わず笑つてしまふくらい、空々しい響きを滲ませていた。

* * *

有「…つと。ここが分かれ道、かな?」

花「うん。ストラップどうもありがとう。」

有「…いや。じゃ、西木野のこと、宜しくな。」

花「うん。じゃあまた学校で。」

そう言つて小さく手を振りながら歩いて行く小泉を見送る。姿が見えなくなつたところで軽くあげていた手を下ろすと溜めていた独り言がため息と共に吐き出された。

有「何となく、か…。」

有「…」

方向転換をして元来た道を歩き始める。どれだけ無心で歩き続けようとも、思考を止めることは出来なかった。脳裏に先ほどの小泉の言葉が蘇る。

——『随分優しいんだね。西木野さんに』

有「…っ!!」

瞬間、僕は駆け出した。目的もなく、前も見ずがむしやらに走り続ける。

けれど、どこまで走ろうと、呼吸が乱れようと足が動かなくなろうと、一度始めた思考を消すことは出来ない。頭の中から容赦ない糾弾の音が聞こえる。これは…あの時の声か。高坂たちを見た時、彼女達という資格はないと僕を責めた、心の声——。

《…何となく?違うな、割に合わない行動の理由を言葉で誤魔化していただけだ。》

有「…違う。」

気づくと僕は今までできたことのない橋の上に立っていた。手すりに手をかけ、荒い呼吸を整えながら反論するも声は止まらない。

《じゃあなんだ？親子の愛に感動したから？バカ言うな。そもそもいつものお前ならあの家に行こうともしなかったはずだ。》

有「…。」

《分かっているんだろう？そうして必死に消そうとしているのが何よりの証拠だ。》

有「…黙れ。」

僕は弱々しい声を搾り出してその続きを拒絶する。心の中の僕がにやりと獰猛に笑った、気がした。

《お前は西木野を友利と重ねてみていたんだよ。そうしてあの学園で友利を救うことも、手を伸ばすことすら出来なかった罪悪感を塗りつぶそうとしているんだ。》

有「黙れ！」

指摘された瞬間、頭にカツと熱がのぼる。声が大きくなる、呼吸が荒くなるのを止められない。

《そうして自らの罪悪感を消し、自分は善良な人間だと思い込みさえする。全く大した偽善者っぷりだよ。》

有「黙れ！黙れ！！」

——ダメだ。熱くなるな。冷静になれ。

《結局お前は何も変わっちゃいない。》

有「黙れ！黙れって言ってるんだろ！」

——やめろ。正気を失えば、発動してしまう。

《所詮お前に変わることもなんて無理だったんだよ。》

有「やめろ！黙れ！」

——自意識で止めることすら許されない、周りを巻き込む自滅能力。

《お前の頭の中は自分のことだけでいっぱい。あの頃のままだ。》

有「黙れ！黙れよ!!!」

——崩壊の、能力が。

《やっぱりお前に高坂たちの傍にいる資格なんて ——》

有「黙れえええええ!!!」

!!!

ピキツ、という音が自らの足元から鳴るのと、
有「ぐはっ!？」

バキツ、という音とともに、まるで何も無い空間から蹴つ飛ばされたかのように僕の身体が吹っ飛んだのはほぼ同時だった。

有「な、なんだ…?」

ぶつけた頭をさすりながら、顔を上げた僕の視線の先には、
友「つたく、なにをやってるんですか貴方は…。」

「誰か一人に対して姿を消すことが出来る」能力者であり、星ノ海学園の生徒会長、友利奈緒が呆れた顔で立っていた。

【正月特別編】新年

冬休み。それは東京都学生達にとって、クリスマス、お正月と満喫しているうちにいつの間にか通り過ぎてしまうような幻のような休みである。楽しいことは目白押し、しかもその後はしばらく特に大きなイベントもないと来れば、人々が浮かれたつてしまうのも無理はないだろう。しかし、そんな人々に混じること無く必死の形相で日々を過ごしていく人種も多く存在するのがこの時期だ。中学、高校の三年生、つまり受験生だ。受験を控えた彼らは正月とクリスマスは受験が終わったらやって来ると寝る間も惜しんで英単語を覚え込まされ、数式を解き続ける。現在音ノ木坂学院高校三年生である所の僕も例外ではなく、寒空の下、日々を勉強のみに費やしていた——筈だったのだが。

有「…なんで僕は大晦日の朝つばらから神社の掃除をしているんだ？」

希「んー？掃除は大事やで？新年までにキッチリと掃除を済ませて、神様にも心地よくしてもらわんと！」

有「だからそれはお前の仕事だろうと言ってるんだよ！」

希「気にしない気にしない♪有宇君だってあんまり勉強づめだと体壊しちゃうやろ？」

有「去年「ウチは今年受験で大変なんよ！」とか言つてここの掃除手伝わせたのはどこのどいつだ!？」

希「んん〜誰やったかな〜？」

有「コイツ…」

箒を持ったまま首を傾げる希を憎々しげに睨み付ける。ここ一年半以上を通して、いい加減見慣れてきた希の巫女服姿だが、やはり何度見ても大きく膨らむ胸元に目がいつてしまう。しかも噂によると彼女の豊富な胸は大学生になってなお成長を続けているらしい。そう言われてみると確かに前見た時より大きくなっているような…？

などと、途中から睨みつけているというよりただ見とれてしまっていた僕の後ろから、クスクスと笑い声が聞こえてきた。

絵「諦めなさい。こうなつた希には誰も勝てないわよ。」

有「絵里…お前…な、あ…。」

希と同じように箒を抱え、巫女服に身を包みながら笑う絵里はあまりにも絵になつていて、文句を言おうとした口が途中で止まってしまった。それを見て不思議そうに首を

かしげながらも微笑を絶やすことは無い。その姿からは、初めてあった頃の敵意は微塵も感じられなかった。いつものポニーテールはお団子型に丸められ、頭の上に添えられている。金髪と巫女服という一見ミスマツチな組み合わせが、逆に彼女の持つ女性本来の奥ゆかしさを全面に押し出していた。この美しさをどう言葉にしようかと悩んでいると、えりの更に後ろから新しい声がかかる。

に「そうよ！そもそも今年最後の日にこーーんな可愛い美少女達の巫女姿が見れるのは世界でアンタだけなのよ？感謝してほしいくらいよ！」

有「…。」

何だにこか。

希「乙坂くん？そろそろ手伝ってもらえるー？」

有「はあ…しゃーねーな。」

に「「しゃーねーな。」じゃないわよ!!!」

有「ぐはっ!?!」

渋々立ち上がろうとした僕に全力の手刀が振り下ろされた。

に「アンタねえ！希と絵里にあれだけ尺使っというてにこは五文字ってどういう事よ

!?!」

有「十分だろ。」

むしろ文字を打ち込んだことに感謝をしてほしい。

に「どこがよ！もっと私のプロポジションについても語りなさいよ！」

有「ぶ、プロポジションを語れだど!? バカな！にこ、お前僕にそこまで残酷な仕打ちをしろと言うのか!?!」

に「どういう意味よ!!!」

いやそのまんまの意味だけ…。その後にもことぎやあぎやあと騒いでいると、絵里がパンパンと手を鳴らして箒を立てた。

絵「はいはい。それ位で終わりにして2人ともそろそろ手伝つて。」

に「仕方ないわね…。」

有「なんで僕が…。」

いいながら渋々動き出す。希はそんな僕達を見て一人微笑んでいた。

希「ごめんな。有宇くん。」

掃除がひと段落付き、少しだけ休憩していると、希が急にそんなことを言ってきた。

希「受験勉強、邪魔になるかもって分かってたんよ。でも、有宇くん、いつも一人で

抱え込んだじやうから…。」

希「だから、大晦日のこの日。1回だけ様子を見に行こうって、3人で決めてたん。」
有「…。」

…：…そういう事か。なぜ、3人が今日ここに集まっていて、僕が呼ばれたのか。この3人はどちらかというところいう時陰ながら応援してくれるタイプだと思っていたから違和感があったが、そういう取り決めがあったなら領ける。でもなあ…

有「先に言ってくれば良かったのに…。」

ため息交じりに言うと、希は申し訳なさそうに体を縮こませる。

希「ごめんな。でも、そう言っちゃったら有宇君は無理してでも来るやろうし…。」
有「む…。」

そこまでお見通しか。確かに、もしその理由を聞かされて希たちに呼ばれていたなら、僕はたとえインフルエンザにかかっていたようとTシャツで会いに行つただろう。

それにしたって他にやりようなんていくらでもあっただろうに…。

様々な感情を込めもう1度ため息を吐くと、先程までの威勢はどこに行つたのか、希はビクつと体を固めてしまっている。目はもうすでに涙目だ。…全く、こんなことになるくらいにまで心配かけちまうとはな。しかし、コイツらは僕のことを心配してここまでしてくれたというのだ、ならば僕に出来ることは一つしかない。僕はすっかり小動物の

ようになっていている希の頭に一瞬だけ手を載せると、早口で言った。

有「…希。今日だけ…」

希はしばらく手が置かれていた頭に右手を乗つけていたが、僕の話が終わると嬉しそうに大きく頷いた。

希「うん！」

真つ白な巫女服のせいなのか、そうして微笑む希の頬はいつもより少しだけ赤みがかつているように見えた。

* * *

有「…おい、凜。これはなんだ？」

凜「ラーメンだよ！」

神社の清掃を終えた後、凜に昼メシを奢ると言われたので、僕は何度目かの西木野邸にやって来ていた。凜に呼ばれたのに西木野邸に行くという時点で嫌な予感はいしたが…。

僕は痛むこめかみを抑えながら凜に重ねて質問した。

有「…いや、ラーメンなのは別にいいんだ。僕だってラーメンは嫌いじゃないしな。

…でもなあ、なんでラーメンにカツが乗ってるんだよ!？」

凜「いやーやっぱり受験に勝つ！って思ってる！」

有「だったらラーメンを消せよ!」

凜「ラーメンを消すなんて凜には出来ないにや!」

有「じゃあせめて別の皿に入れろよ!? ラーメンのスープでせっかくのカツがグチャグチャじゃねえか!?! 大体、カツって言うのはだな——」

花「お待たせー!」

有「は、花陽…それは?」

僕がカツの無念を晴らすため凜に説教をしようとした時、リビングのドアが開いてテシヨン2倍増しの花陽が入ってきた。その理由はすぐ分かった。彼女の手には僕の片手に余るほどの大きさのお茶碗に入った高さおよそ三十センチといったご飯の山が作られていたのである。いやよく零れないなアレ…。

花「やつぱり力を付けて勉強する為にはご飯が一番だと思つて!」

お前はな。よつぽどそう言つてやりたかったが、輝かんばかりの笑顔を見るとそれも出来ない…反則だろ、その笑顔…。

真「全く、無茶ばっかりして2人とも子供なんだから。」

そう言つて部屋に入つてきたのは、μ s 作曲担当であり、現在音ノ木坂学院副会長をしている真姫だ。

有「…。」

真「な、何よ。」

じつと真姫の体、と言うより手を見つめる。…よし、こいつは何も持っていない！

真「ゆ、有宇!? 何でいきなり泣いてるのよ!?!」

有「いやお前は一人まともだったんだなと思つて…」

まさかコイツがここまでの量のご飯とラーメンを食べなければならぬ僕を氣遣つてくれたとは…。感激のあまり涙していると、真姫は「そ、そう。」と満更でもなさそうに髪をクルクルしてから胸を張つて言った。

真「ふっふーん。よっぽど氣に入つたようね! 私のトマトスパゲティ!」

有「……は？」

なん……だと……。僕の反応を見てもドヤ顔を崩さない真姫から目線を外し、思考の止まった頭を凜に向けると、彼女は不思議そうに「あ、うん。真姫ちゃんのスパゲティなら最初からそこにあるにや。」と言ってテーブル右を指さす。そこに目を向けると、そこには確かに暖かそうなトマトスパゲティとトマトサラダがご丁寧にフオークナプキン完備で置かれていた。て、テーブルのデカさとラーメンのインパクトのせいで全く気づかなかつた……。ていうかこいつら自分の好物しか用意してねえ……。

有「こ、これ……全部食べるの？」

真・凜・花「当然！」

恐る恐る、といったように聞いてみたが、思いのほか力強い返事を頂いてしまった。有「……。」

いや、でもこれは流石に食いきれる気がしないぞ……？僕がなおも渋っていると、いつの間にか近くに来ていた凜が僕の顔を覗き込むように聞いてきた。

凜「どうしたの？もしかして、お腹痛いの？」

有「い、いや、そういう訳じゃないんだが……。」

なおも言いよどむ僕を見て、凜が申し訳なきように目を伏せた。

凜「じゃあやっぱり迷惑だった……にや？」

有「…そんな訳ないだろ。えい。」

凜の頭の上に左の手を載せる。驚いて顔を上げる凜のおでこに、右手で用意していたデコピンを容赦なく食らわせた。

凜「にや!？」

僕は前後不覚になる凜に構わずテーブルに座ると箸を持って両手を合わせた。

有「頂きます。」

言うが早いのか、僕は目の前の白米を一気に口にかきいれる。ひと噛みした途端、これまで意識したことのないなかつたコメの甘味が口一杯に広がった。僕は未だに何が起こつてるか分からないらしい花陽の方を向いて言う。

有「花陽! 凄いなこの米!! 今まで食べた中でも最高だ!」

花「えっ…あ、ありがとうございます!」

パアア…と音が聞こえそうなほど顔を輝かせ笑う花陽。うん、やつぱり花陽は笑顔が一番だ。僕はそのまま、スパゲティ、ラーメンとどんどん食べ始める。

有「真姫。このスパゲティ酸味が聞いててめっちゃうまいな!」

真「と、トーゼンでしょ!」

真姫はフン! と顔を背けながらも、その声と口元はどこか嬉しそうだ。

有「凜! カツとラーメンつてのも意外と悪くないな!」

凜「ほ、ホント？」

顔を上げて嬉しそうに笑う凜。子供のように純粹に綺麗な笑顔だ。

有「ああ！うまい！本当に美味しいよ！」

最初からお世辞でも美味しいと言うつもりだったのだが、3人の作ってくれたものはどれも本当に美味しかった。量さえ考えてくれれば毎日食べたいくらいだ。その後もガツガツと食い続ける僕を見て、ようやくホットしたように顔を綻ばせる3人。その姿を確認して、僕は箸を置くと三人の方を見ながら顔を真剣なそれにして言った。

有「花陽、凜、真姫。たしかに僕は受験生だ。しかも困ったことに頭が悪い。行きたい大学に通うためには寝る間も惜しんで勉強しなきゃならない。」

凜・花陽・真姫「……」

黙っている3人の顔をそれぞれ見ながら僕はニコリと微笑みかける。

有「でも、そもそもお前達がいなかったら、僕は進学しようなんて全く思わなかった。お前達の頑張りを近くで見えていたからこそ、自分も頑張らなきゃって、そう思えたんだ。」

これはただの事実だ。きつとこいつらに会わなかったら、僕は今でもダラダラと適当に日々を過ごしていただろう。

有「だからそんな顔をするな。お前達のおかげで頑張れてるんだ。そのお前達が僕

のことを思つてしてくれた事が僕のやる気に繋がらないわけないだろう。」

有「僕にとつてお前達より大事な試験なんて存在しない。それよりせつかく会えたんだし、一緒に食べようぜ？せつかくの料理が冷めちゃうよ。」

言い切ると僕は食事を再開する。恥ずかしいことを言つてしまったせいもあつて脇目も振らずに食べ続けていると、後ろから凜の嬉しそうな声が聞こえてくる。

凜「よーし、それじゃあ真姫ちゃんの家でのお昼ご飯パーティー開始にやー！」

言うが早いか、キツチンから自分の分のカツラーメンを取り出してくる。花陽と真姫もそれぞれ僕に作ったものと同じものを追加で持つてきた。：量まで僕と同じなのは驚いたが。

有「：いや、ていうか、これを4人で分けるつていう選択肢は？」

花「えつ：でも半分だと私も有宇くんも足りないかもしれないし。」

有「花陽。お前は一体どこに向かつているんだ：。」

凜「それにたつぷり食べて元氣つけて貰わないと行けないし！」

有「お前はそのラーメンを1人で食べたいだけだろ!？」

真「はいはい。情けないこと言わないの。男の子でしょ？」

有「とか言いつつ嬉しそうに人のサラダのトマトだけ取つてるんじゃないやねえよ真姫!!」

ぎやあぎやあ喚きながらも、ようやくいつもの空気で食事を始める。食べながら話す

お互いの顔は笑顔ばかりだ。：まったたく、昔は人と食事をすることを億劫にしか感じてなかつたつてのにな。一昨年までの僕が見たら腰を抜かすかもしれない。

有「あ、そうだ。3人とも、この後なんだけど——」

こちらを向いてきた3人に事情を説明する。話を聞き終えた3人は、一瞬お互いの顔を見合わせると、揃って大きく頷いた。

凜・真・花「「うん！」」

そう答える三人の顔は、いつもの最高に魅力的な笑顔だった。

* * *

穂「有宇くん次これ運んで！」

有「何故だ：なぜ僕がこんな目に：。」

——1年生組との食事会の帰り道、重いお腹をさすりながら歩く僕に1本の電話がかかってきた。画面表示に映る差出人は——「高坂穂乃果」。

有「：。」

電話を切った。スッキリした気持ちで歩き出すとすぐにまたケータイになる。液晶パネルを見てみると画面表示に映った文字は——「南ことり」

有「もしもし。ことり？珍しいな。僕に電話を掛けてくるなんて。何かあったか？」
迷わず電話にでた。

穂「なんで私の電話には出なくてことりちゃん電話ならでるの!!!?」

有「ちっ、やっぱり穂乃果か。切るぞ。」

穂「切らないでよ!! ていうか扱いがいくらなんでも酷過ぎるよ!!!?」

いやだっってお前の要件分かりきってるし絶対嫌なんだもん…。

有「気のせいだよ。てかなんか用か。」

穂「来年用のおもち作るからお店の手伝いして!」

有「やだ。断る。無理。」

穂「早っ!! 私が言い終わる前にはもう言っただよね!?!」

やっぱりかよ…。コイツのお店は毎年お餅作りをして新年を迎えるのが決まりらしく、大晦日には超忙しく働いているのが毎年の事らしいのだ。去年僕も手伝わされたのだが、休み無し給料なしの重労働。上司（穂乃果の父親）は死ぬほど怖いし…。あんなブラックな職場は恐らく世界でも随一だろう。

穂「おねがい! 今年は特に大変みたいで…。」

有「去年も言っただよな、それ。」

のらりくらりとかわし続けていると「代わって」と言う声とともに甘い声が流れてきた。

こ「もしもし。」

有「ことり。お前も行ってたんだな。」

こ「うん！毎年の事だから。でもホントに今年は特に大変で：重いものが結構あるの。」

有「海未にやらせればいいだろう。いるんだろ？あの見た目だけか弱いやつ。」

こ「ゆ、有宇くん。この場にいるからあまりアブナイことは言わない方が：。」

いるのかよ：。と思つたらことりが間にいるはずなのに電話越しから「そうですか。そんなに私は怪力に見えますか：。フフフフ：。」という声が聞こえてくる。軽くホラーなんだけど：。

有「ま、まあそんな訳だ。他を当たってくれ。」

今行つたら こきつかわれるどころか海未に殺されかねない。そう言つて電話を切ろうとする僕を、ことりの「有宇くん：。」という言葉がアツサリ止めた。

こ「有宇くん：。」

2 回目の名前呼びと共にすうつと息を吸う音が聞こえる。：やばいこれはやばい。次に何が起こるかありありと予測できた僕はそれを回避するために通話終了ボタンへと手を伸ばす、しかしそれより一瞬早く、ことりの切なげな声が僕の耳へと届いた。

こ「お願い：私、有宇くんに手伝ってもらいたいので：。」

有「任せろ。」

ノータイムで返事をした時には、僕はもう穂むらに向かつて走り出していた。

* * *

有「つ、疲れたー…。」

海「お疲れ様です。」

最後のお餅を運び入れ、空気が抜けたように座り込む僕に、一緒に運んでいた海未がペットボトルのお茶を二つ持つてきてくれた。…こいつ結局僕と同じ量運んだんだよな…めっちゃ楽そうに。

有「いやもう絶対明日筋肉痛だぜ…。毎年こんなことやってんのか？」

僕の情けない声に海未がクスクスと笑う。

海「いえ、本当に今年は特に多かったですよ。注文が例年の倍くらい来ていたらしくて。多分、μ'sの高坂穂乃果の家、という認識を持つてくれている人たちがいるからなんですしうね。」

有「ああ…なるほどな。」

そうか…こいつらもう立派な有名人だもんな。海未の顔が何となく直視しづらくなって顔を空へと向ける。今年最後の太陽はすでに半分ほど沈んでいて真っ赤な夕日
が神田の街を赤く染めていた。感慨深く街を眺める僕に、海未が珍しくからかう様に言

う。

海「でも有宇が来てくれたおかげで無事に終えられました。穂乃果のお父様も上機嫌だったようですよ?」

有「嘘だろ…?」

あれで?というか穂乃果のお父さん顔が怖いとか威圧感がどうか言うより顔が全く見えないんだよな…。帽子を深くかぶってるせいだろうか。

海「ええ。「来年はアイツにも餅を作らせるか。」と仰ってましたよ?」

有「来年もやらせる気満々だなオイ!」

人の話聞かないところは親子そっくりか!海未はそんな僕を見てまた笑い、言った。

海「でも本当に気に入られたみたいですよ?真姫のお母上や理事長とも仲がいいようですし…有宇は年上には好かれるのですね。…こ、今度、私の両親とも会ってみます?」

有「は?いや、無理だけど?」

何やら俯きながらボソボソと出してきた海未の提案を即答でお断りする。海未はし

ばらく固まっていたが、やがてゴゴゴゴゴという音を出しながらゆつくりと立ち上がり、こちらに向かつて一步踏み出しながら聞いてきた。その時にコンクリートの地面から聞こえてきたビキツという音は海未が小枝か何かを踏んだ音だと信じたい。

海「…一応……理由を聞いておきましょうか？」

有「お、おおおおう。り、理由な。理由。」

怖いから。

と言ったら僕の生命が停止するのは火を見るよりも明らかだったので、僕は受験勉強で育ててきた頭をフルにつかっけて言い訳を考える。ていうかなんでコイツいきなりこんな激怒モードなんだよ……。頭をフル回転させてる間にも確実に近づいてきている海未を押しとどめるように右手を出しながら言った。

有「い、今が、お前にとって大事な時期だからだ。」

海「……は？」

ポカン、と固まってしまう海未とうろたえる僕。…やべ、カツコいいこと言ってみた

けど後が続かねえ。

有「ほ、ほら！今は僕もお前も受験生だろ？それに、大変なのは僕達だけじゃなくて家族もだろ？ほらお前の事気遣ってくれたり受験料出してくれたり…だから、その、なんだ、こんな所で余計に気を遣わせるより、受験のあととかに行つた方がお互いの将来のためにもいいんじゃないかな…：みたいなの？」

しどろもどろになりながらも言い切つた僕の姿を見て海未がぶつ！と吹き出す。そのままこらえ切れない、というようにお腹を抱えてクスクスと笑い出した。いきなり切れたり笑いだしたり海未にもはや訳が分からず啞然としてみると、海未は笑いすぎて出てきたらしい涙を拭いながら言った。

海「まあ…今日の所はそれで許してあげましょう。」

有「ほ、本当か!？」

聞くと、コクリと頷く海未。や、やったぜ！よく分かんないけど初めて海未に許されたんじゃないか!?!?そうか…：これが大晦日パワーだったのか…。

海「ただし!！」

嬉しさのせいで頭の悪いことを考えていると、海未がもしかしたら今年一番じゃない

かというような綺麗な笑顔で、しかし間違いなく僕の人生最大の恐怖を感じさせる笑顔で言った。

海「約束しましたからね？ 受験がおわつたら、 ” お互いの将来 ” のために ” 私の両親に会う ” と。」

有「お、おう…善処する。」

なんか意味が変わってきいてないかそれ…？ しかしこの直後に扉が開かれたせいで、その疑問が形になることは無かった。

穂「ずるーい!!!」

有・海「ほ、穂乃果?!!」

どうやら話を聞いていたらしい闖入者、高坂穂乃果は、突然の登場に驚きの声をあげる僕ら2人に構うことなく、もう1度抗議の声を張り上げた。

穂「ずるい！海未ちゃんばっかりずるすぎるよ！有宇くん！行くならうちにも来て!!!

ご両親に挨拶して!!!」

有「いやお前の家には来てるよ!?!」

親御さんにもさつき会ったよ!?! 謎すぎる穂乃果を宥めていると、いつの間にか隣にいたらしいことりも戦い(?)に参加しようとする。

こ「それなら私の家にも来てほしいなあ。お母さんと3人でケーキ作りとかしよう

よー。」

有「ん……まあ別にいいけど。」

海「ゆ、有宇!! 先ほど私の家に行くと言ったじゃないですか!!」

有「ええ!!?」

承諾すると何故か海未まで話に入ってきて訳が分からない。あまりの事態に混乱して何も出来なくなっていると、2階の窓がガラリと開いてそこから雪穂ちゃんが顔を出す。

雪「おねーちゃん。お母さんが有宇くんたちと馬鹿ばかりやってないでご飯食べていってもらいなさいってさー!」

まさに鶴の一声。一触即発の状態になっていた3人がピタリと止まり、穂乃果が返事をする。……それは確かにありがとうなんだけど雪穂ちゃん? 僕が馬鹿の筆頭みたいな言い方するのはやめてくれる?

穂「分かったー! 今行くー!……だつてさ。有宇くんも食べてくでしょ?」

有「そうだな。歩末もいって言つてたし、お呼ばれするよ。」

むしろ行けいけと言つた感じだった。そんなにお兄ちゃんとお大晦日に一緒にいたく無かつたのだろうか……グスツ。僕らは太陽が沈みきつて冷えてきた風に震えながら、家の中にお邪魔した。

* * *

有「ふう…食べた食べた。ていうかすごい作ってたんだな穂乃果のお母さん。」

高坂家の食卓にお邪魔した僕は、お父さんの正面という中々スリリングなポジションに耐えながらも、穂乃果のお母さんの作った大量のご馳走をいたのだが、少々食べすぎてしまったらしい。僕がお腹をさすりながら夜風にあたっていると、ちようど来たらしいことが隣に座ってきた。

こ「毎年私達がお邪魔してるからね。それでも今年は多かつたけど。結構食べてたね。」

有「ああ。明日のおせち料理は入らないかもなこりや。」

こ「大変。穂乃果ちゃん家は正月のお餅が凄くあるのに。」

有「本当に多そうだな…。」

適当な会話をしながらどちらともなく空を見上げる。大晦日で多くの店が閉まつているからなのか、神田の空にはいつもより多くの星が見えている気がした。

「…」

お互い沈黙のまま星を眺め続ける。気まずい

などの感情は一切湧いてこず、時々吹く夜風が気持ちよかつた。やがて、ことりが眩くように話しかけてくる。

こ「今年も…色々あつたね。」
有「…そうだな。」

この1年。僕は去年の四月に音ノ木坂学院生として転校してきたので、初めて1年の高校行事を同じ学校で経験したことになる。…本当に、色々あつたな…。その一つ一つを回想していると、隣からことりがこちらを向く気配した。顔を向けると、ことりはこちらを真剣な表情で見つめていた。

こ「うん。色々あつた。色々なことをして、でも何をすることもみんなが一緒に…とても楽しかった。だから、ありがとうね。有宇くん。」

有「……。」

こ「…去年の留学の話があつた時、もし有宇ちゃんと穂乃果ちゃんが来てくれなかったら、私はきつと後悔してた。多分向こうに行つてもみんなの事ばかり考えちゃつて…どっちも中途半端になつちやつてたと思う。だから、ありがとう有宇くん。私を連れ戻してくれて。」

そう言つて微笑むことりの姿は空に広がる星の一つように儂げで、美しい。僕は見とれそうになりながら言つた。

有「…別にお前のためにやつた訳じゃない。」

こ「……え？」

瞬間、微笑みを消し、傷ついた、という表情をすることり。しまった、言葉が足りなかった。みるみる目に涙を溜めていくことりに僕は慌てて言葉を繋いだ。

有「あ、いや、そういう意味で言ったんじゃないんだ。ただ、あの時お前を止めたのは僕達の為だったんだ。」

こ「有宇くん達の…ため？」

その言葉が意外だったのか、目を丸くしてぽかんと言うことりに大きく頷く。

有「そうだ。僕達がお前を止めたのは、僕達がワガママを通すために行つたんだ。お前が本当に行きたがってるのどうかは分からない、でも、僕達はこれからお前と一緒にいたい、つて。そう思ったから僕と穂乃果はお前を止めた。それだけだ。だからお前が感謝する必要なんてない。」

どうにか嘯まずに言い切ると、ことりはポカンと開いていた口を微笑に変えて言った。

こ「…うん。そっか。…でもそっちの方がちよつと嬉しいかも」

その時点ですでに大分恥ずかしくなっていた僕は、最後につけ加えられたことりの言葉になんと言つていいか分からず、黙つて空を見上げる。

こ「来年も、みんなと一緒にいたいなあ…」

呟くように発せられた言葉。それは無意識の願いだつたのかもしれない。でもやつ

ぱり僕には返す言葉を見つけれそうにも無かった。僕はことりの願いを叶えてやる術を持たない。

有「…ことり。」

こ「ん？」

——そんな僕が口にした言葉は、今朝希に、そして、昼に凜たちに言った言葉と同じものだった。何が起こるかかわからない未来で不変の願いを叶えることはできない——

有「みんなで、初詣に行かないか？」

——だからそれは、神様に願うことなのだろう。

* * *

有「うっげー…」

穂「うわあーやっぱり混んでるねえ…」

11時頃、僕達は日頃からお世話になつてゐる神社、神田大明神へとやつて来ていた。もちろん、今朝やお昼の時に頼んでおいた希たち元3年生組や凜たち元1年生組も一緒だ。驚いたことに今年は全員しつかり振袖に着替えていて、美少女、というかこの辺りでは「μ, s」として有名な彼女達に多くの目線が集まる。そのμ, sを連れている僕にも好奇の目線が降り掛かっていた。というか男共の嫉妬の目線がいてえ…。

有「まあ、仕方ない、並ぶか。」

そう言つて並び始める。やることもないのでボーツとしながら順番を待っていると、隣に来ていた穂乃果が話しかけてくる。

穂「ねね！お願いごと、なににするか決めた?？」

有「お前は受験合格じゃないのか……。」

凄すぎるだろう。僕が呆れながら聞くと、穂乃果は首を降る。

穂「私もそれもお願ひするつもりだけどき！他のやつ！」

有「いくつする気なんだよ!？」

穂「ええー沢山あるよー！まず、おこづかいアップでしょ？あとデイズニーランドとかカラオケとか……あ、ゲームセンターも行きたい！」

有「欲にまみれすぎだろ……。」

ていうか自分でなんとかなるじゃねえか。どんな神頼みだよ。穂乃果は呆れ返つた僕の声にすこしひるみながらも、言う。

穂「み、みんなこんなもんだよ……あと、今年もみんなといれます様につて。」

有「そつか……。」

ことりと同じ願ひ。それはきつと全員共通の願ひとなるだろう。…僕もお願ひが二つになつちまうな。まあいいだろう。毎年ここの掃除をさせられているんだ。それく

らしいのワガママは見逃してくれるだろう。そうこうしているうちにちようど僕達の順番が来たらしい。10人揃って神前に上がろうとする直前、穂乃果がこそつと聞いてきた。

穂「…ね、去年はどんなお願いしたの？」

有「…」

去年、か。そういえばどんなお願いをしたんだったか。去年、初めてここでお参りをした時の僕の願い。そうだ、あれは確か——

有「さてな。忘れたよ。」

——思い出す直前で僕はそういった。答えが返ってこなかったにも関わらず、そつかと答える穂乃果はどこか嬉しそうだった。10人一緒に二礼を済ませると同時に、新年の始まりを告げる除夜の鐘が鳴り響いた。その音に混じって聞こえた小さな声は、大音量の鐘の音がなっているにも関わらずすっかり僕の耳に届いた。

穂「有宇くん、あけましておめでとう。」

有「ああ。こちらこそ今年もよろしく。」

その声に答えながら、僕達は二拍手をして目を閉じる。真つ先に出てきた願いは、

らずも去年と全く同じものだった。

——今年も、いい1年になりますように。

目を閉じ祈る僕達。そんな僕達の背で除夜の鐘はいつまでも鳴り響いていた。

第11話 決意

有「と、友利……いつから？」

ものすごいタイミングで現れ、人を蹴つ飛ばしてくれた闖入者に、僕は道に這いつくばったままの状態で訪ねた。

友「んー、いつからっていうとまああなたが女子高生のストラップを買い取ろうとしてた所からですね。」

いや、スクールアイドルの、な？僕を現役女子高生の持ち物買おうとした変態みたいに言わないでくれる？

と、突っ込めなかったのは、その言葉の意味がそれ以上の衝撃を僕に与えていたからだ。

——あなたが、ストラップを買おうとしたところからですね。

——つまり、友利は僕と小泉の会話を聞いてた、ってことになる。

……どこまで、気づいてる？真っ先にそんなことを考える自分に嫌悪感を抱かずには

いられないが、それ以上にコイツに知られたくないという気もちは大きかった。

自分への同情や罪悪感で僕が他の人を手助けしていたと知ったときコイツがどんな反応を見せるのか。

それを知るのが、とても、怖い。

有「…見てたんなら知ってるだろ。あれは、A—R—I—S—E。スクールアイドルだよ。」
探るように、慎重に。そうやって出した言葉に違和感を感じたのか、友利は一瞬だけこちらに目を向けたが、「そーなんですか。」と話を続けた。

友「まあとりあえずそろそろ立つてもらえますか？周りがすごい目でこっち見てきてますし。さっさと帰りましょう。」

有「誰のせいだよ…。」

友「あのままほっといた方が良かったですか？」

有「…ありがとうございます。」

素直にお礼を言うと、うむと頷く友利。まあ何も言うまい。コイツが蹴つ飛ばすのがあと数秒遅れていたら冗談抜きで死んでいたかもしれないのだ。いや、念能力を使える僕は助かったかもしれないが、周りにいた人達を巻き込んでしまっていた可能性はかな

り高い。そう考えるだけでゾツとする。

友「まったく、高坂さんの崩壊の監視に付けた貴方が崩壊起こしそうになつてどうするんですか……。帰りますよ。歩未ちゃんがオムライスを作つて待っています。」

意外にもお咎めなく解放されたことに違和感を感じながらも、僕は友利の横に並んで歩き始める。僕が友利の横に並んだのを確認してから、友利が口を開いた。

友「……先ほどの話。」

有「ん？」

友「……ストラップの話です。スクールアイドル、と言うところの前高坂さんがやると言っていたアレですか？」

有「……ああ。そうだよ。」

監視対象の能力者、つまり高坂についての報告を、僕はほぼ毎日友利に対して行わされている。その中の一つに、高坂が何をするために学院に残ったのか、という説明も確かしたはずだ。

友「ふむ：聞いたところ学校のアイドルが校外でも活動をするというシステムのようですが……。それをあなたが手伝っていると。」

有「まあ監視の一貫だけだな。」

話の流れに不穏なものを感じていると、案の定と言うべきか、友利はついに決定的な

セリフを口にした。

友「…そしてそのアイドルグループの作曲をしてるのが西木野さん。そう言えば最近随分熱心でしたね。」

覚悟していた事なのにそれを聞いた瞬間、僕は激しく動揺した。身体中から冷や汗が出て来るような錯覚に陥り、表情は完全に固まってしまふ。友利は一瞬こちらに目を向けながらもまるで気づいていないかのように歩いていく。

…これは、バレてる、つてことなんだろうか？そもそも、コイツは頭も良く、かなり鋭い。元々僕の考えなどお見通しで、最後の確認にカマを掛けただけなのかもしれない。時が止まったような静寂の中で、友利の口だけがゆつくりと動き始める。どんな罵倒がくるのかと身構える僕にかけられた言葉は、予想だにしないものだった。

友「…いい事なんじゃないですか？」

……は？意外どころか状況に合わないとまでいくような友利のセリフに唾然としていると、友利が続けて話し始める。

友「あなたがやっているのは善行ですよ。何が理由であろうとね。」

有「……」

黙り続ける僕に構わず、友利は続ける。

友「あなたが何に同情し、罪悪感を感じた結果なのかは分かりませんが、あなたがしている事は困っている後輩を助けてあげているんです。カニンング魔だった頃を考えれば信じられない進歩ですよ。」

有「いや、友利、それは——」

友「——ただし。」

ようやく動いた口で反論めいた事をしようとする僕を遮るかのように、友利が言葉を続ける。

友「それはあなたがちやんと西木野さんに向き合えている限りの話です。その誰かと重ねて見てしまうのではなく、ね。」

有「……」

友「……イメージの押しつけは悲しいですよ。」

西木野さんにとつても、その子にとつても。友利はそう小さく呟くと、更に話し続ける。

友「あまり関係はありませんけど、私の話をしましょうか。話したことがあつたかも知れませんが、能力がなかった時、というか能力の存在を知らなかった時、私には多くの友人がいました。……ですが今は、知つてのとおりです。」

話す友利は完全な無表情で、彼女が何を思っているかを感じ取ることは出来ない。

友「ですが私は、そうなっている今の現状を何一つ後悔していません。私は超能力者を守る為に動く現状に誇りを持っています。今こうしていることが、あの頃よりも不幸だとも思ったことは一度もないですよ。」

ともかく、友利は締めるように言う。

友「あなたがいいと思っていることが、イコールで相手のいいと思っていることとは繋がるとは限らない。そういう事ですよ。あなたが本当に西木野さんの力になりたいと考えているなら、まずは彼女にきちんと向き合つてあげなさい。」

少し話しすぎましたかね。と言うと、僕の1歩前へ踏み出す友利。

友「…余計な話が長くなってしまいましたね。私は用事があるので先に戻ります。さっきの話、忘れないでくださいよ?」

有「あ、ああ。」

どうにか返事を返すと、友利は「では。」と言って曲がり角を曲がっていった。

友利が完全に見えなくなったのを確認してから1人呟く。

有「余計な話、ね…。」

僕には「私は大丈夫だからもつと自分のことを気にしろ」と言つてゐるやうにしか聞こえなかつたけどな。いつの間にかあげていたららしい手をポツケに引つ込めながら、一人歩く。あいつは「関係ない話」とも言った。：謝らせてもくれないということなのだろう。余計な同情心や、罪悪感の為に人助けをして自己満足をしていた僕を責めようともせず、ただただこれからの良くしようとすることに力を注ぐ。

有「相手と向き合う、か。」

眩きながら元来た歩いていく。西木野のため、高坂達のため、小泉のため、東條先輩のため、そして友利のため、僕に何が出来るのか。ない頭を働かせているにも関わらず、先程まで止まらなかつた頭の「声」、そして頭の痛みが、少しずつ薄れていつてゐるのを感じていた。

第12話 羞恥

有「PR動画を作るのはどうだ？」

海「衣装がまだ出来てないから無理です。」

有「校内放送で呼びかけよう！」

海「生徒会長に却下されましたね。」

有「なら呼び込みだ！ライブ直前までやろう！」

海「私たちはライブの準備で出れないのですが…女子高の前で男子1人呼び込みをするのですか？完全に変質者ですね。」

有「どうしてお前はそう否定ばかりするんだよ!？」

海「有宇が無理なことばかり言うからです。」

友利と帰った次の日、いつものように高坂たちと4人で登校していた僕は昨日思いついたファーストライブの宣伝方法を話していた。

その後もムムムと頭を悩ませていると、不思議そうに南が話しかけてくる。

こ「というか、今日は随分熱心だね？何かあったの？」

有「い、いや…そういう訳じゃないが…。」

覗き込むように下から送られてきた視線から慌てて目をそらす。

完全にそういう訳である。友利から話をされ、昨夜ない頭を必死に振り絞った僕が出した答えは、「とにかくやれることを一つ一つ考えてやる」という至極単純なものだった。

自分にやれることは限られている、でもやりたいと思ったことがあるならそれをやらない理由はないって言うのが結論だ。

もちろん、西木野の時と同じことにはならない様に自分でそれをやりたいっていう理由も出来る限り明確にしていくってのも必要だが。

そんな訳で真っ先に思いついた「やりたい事」である1週間後に迫ったこいつらのファーストライブの手伝いをしようと思ったわけなのだが…。

有「案外やれる事って少ないな…。」

海「まあ、言っても高校のスクールアイドルですからね。プロのようにマネージャーの仕事が多いという訳では無いでしょう。」

園田が有字は良くやって来てますよと慰めてくれる。

有「そう言ってくれるのは嬉しいけどな……」

何かしたいのだ。タダでさえやれることは少ないのにライブ当日すら高坂達……というか僕のクラスメイトでもある子達を手伝ってくれることになったらしく、まだ学園に慣れておらず、機械に詳しくない僕にやれることは本格的になさそうということになってきているのだ。

有「こうなったらホントに通報覚悟で呼び込みするか……つと、そうだ!」

こ「なにか思いついた?」

有「ああ。チラシ配りをするってのはどうだ?」

海「ち、チラシ配り……ですか?」

有「うん。呼び込みだと当日以外はあまり意味がないかもしれないけど、チラシ配りなら時間帯と場所を書いておけば効果はある。人前で声を出す練習にもなるだろうしな。」

南なら絵を描くことも出来るはずだ。我がナイスアイデアを披露すると、それまで興味無さそうにパンをむぐむぐやっていた高坂が興奮気味に食いついた。

穂「ほれはよ! ゆうふん!」

海「食べながら喋らない!」

すかさず入った園田のツツコミをうけ、ゴクリとパンを飲み込んだ高坂がもう一度叫んだ。

穂「それだよ！それならみんなにもたくさん知ってもらえるし、練習にはもってこいだよ！さつそく今日から……ってあれ？海未ちゃんは？」

有「へ？いや、あれ？」

あたりを見渡すと、確かに先程までツツコミを入れていたはずの園田がどこにもいない。

こ「海未ちゃんなら……そこに。」

南の指さした方を見ると、何故か園田は一人通学路を外れた路地裏でしゃがみこんでいる。

有「ど、どうかしたのか？」

急に気分でも悪くなったのだろうか。慌てて声をかけると、いつもの凜とした声とは似ても似つかないものすごい小さな声が聞こえてきた。

海「ム、ムリです……。」

有「どうした？何が？立てないのか？」

海「し、知らない人相手にチラシ配りなんて……。」

……はい？

こ「あー…。」

穂「やっぱりこうなっちゃったかー。」

理解が追いつかない僕をよそに、なにやら諦めた様のため息をつく幼なじみ2人に視線だけで説明を求めると、2人は真剣な顔をして言った。

穂「実はだね有宇くん…」

こくこく。

こ「海末ちゃんはね……」

こくこく。

穂「とつつつっても恥ずかしがり屋なんだよ。」

こくこく……は？

有「…いや、知ってるけど…えつと？つまり？」

こ「チラシ配りみたい知らない人に話しかけたりするのはちよつと…。」

有「…」

園田の方に目を向けると、縮こまったまま頷く。

海「し、知ってる人なら…：どうにか、なると、思うのですが…。」

限界、と言うように顔を手で覆ってしまふ園田…：なに？もしかしてツツコミ待ちなの？

有「えっと…：整理させてくれ。お前達は廃校を止めるためにスクールアイドルをやってる。」

説明するように聞くと、園田が顔を体育座りの足にうずめたままこくりと頷く。

有「つまりその目的は知らない人たちにアイドル活動を通して学園のことを知ってもらう。」

こくり。

有「で、お前は知らない人の前だと歌えないし踊れない。」

こくり。

有「そしてファーストライブまであと1週間。」

こくり。恥じるように頷く園田を見て唾然としながらも頭の中でシユミレートしてみる。生まれて17年間までもに知らない人と会話もできないシャイガールが1週間でアイドルになれるか……はい無理ですね。ラノベ長文タイトルかよ。

有「……ふふふ。ふはははははははははは!!!」

ほ「ゆ、ゆうくんが壊れた!」

笑いだす僕を見て高坂が焦ったように叫ぶ。そりゃ壊れたくもなるわ。あと1週間だぞ1週間。ひとしきり笑い終わると僕は未だに体育座りの元凶に向かってきけんだ。

有「……ふははははは!!おい園田ア!」

海「は、はいい!」

突然の大声にビックリしたのか、びくう！と体を逸らして顔を上げる園田。初めてコイツ相手に優位に立った瞬間だが、そんな事を気にする余裕もない。僕はピンと立てた人差し指を春の青空に突きつけるようにして叫んだ。

「こうなったらやることは一つ……特訓だ！」

* * *

友「……で、呼び出されたのが私。」

有「ああ。黒羽はこれから仕事みたいだし、高城はそれについて行く気満々で話にならなかったからな。」

海「ゆ、有宇？その人は……？」

有「友利奈緒。前の高校で生徒会長だったやつだ。」

放課後。とにかく人と話をすることに慣れさせようと、僕は唯一と言っていい女子の知り合い、友利を呼び出していた。人選に若干の不安は無くもないが、いきなり男子と

話せと言っても無理だろうしな。歩未だとあいつのコミュ力が高すぎて練習にならんかもしれないし…。

友「…乙坂くん？ちよつといいですか？3人はここで一旦待っていてください。」

有「お、おい…友利？」

友利は僕の腕を掴むと、ニコツと3人に微笑みながら有無を言わせない力で僕を引っ張る。曲がり角を曲がって3人から見えない形を作ると、オオカミもかくやという眼力で僕を睨みつけて言った。

友「…おいコラ。急に呼び出されてみればどういふ状況だこれは？」

有「笑顔とのギャップ怖すぎませんか!？」

マジで殺意100%みたいな目で睨まれてる…。視線で攻撃する能力みたいなものをこいつが持ってたら即死しそうなレベル。

* * * *

友「…なるほど。事情は分かりました。要するに園田さんの人見知りを治すための練

習台になれと？」

有「あ、ああ。」

怖すぎる友利を前にしどろもどろになりながらも説明すると、一応の理解は得ることが出来たらしい。友利は美咲とタメ張れそうなほどのメンチを解除してくれた。

有「このままでとライブが失敗するのは目に見えてるし：ライブがうまくいかなければ廃校を免れることは出来ないだろ？」

そうなれば高坂が絶望による崩壊を起こす危険性が出てくる、という意味を言外に含めて言うと、友利は不機嫌そうに舌打ちを言った。

友「：チツ。分かりました。手伝いますよ。こちらとしても高坂さんの交友関係は把握しておきたかったですしね。」

有「ほ、本当か!？」

友「ただし!」

思わず声を大きくなる僕。それを嘲笑うかのように、友利は邪悪な笑みを浮かべると指を一本立てて言った。

友「一つ条件があります☆」

有「なっ……だつてお前、今交友関係を把握しておきたかつたつて……」

友「それはそれ。これはこれ。能力者を救う仕事のある私のきちよ……な時間を使うんですよ？それなりの謝礼を出すのが筋でしょう。」

有「……ッ！」

やつぱコイツに頼むんじやなかったと思つたがもう遅い。あいつらの前に連れてきた時点で手遅れだ。今更ほかの人間を持つてくることも出来ないだろう。僕はため息をついて言つた。

有「……何が欲しいんだ？」

友利はニンマリと笑うと、立てていた人差し指を校舎に向けた。

友「ここの購買部つてえ、パンがとつても美味しいらしいじやないですかあ。私、豚キムチサンドが食べたいなあー☆」

有「なん……だど!？」

あれは転校して数日の僕すら知ってる、週に1回、一個限定で入荷する超激レア商品だぞ?! 味だけでなく、なんと豚キムチの癖にダイエツトにも効果があると言われていた商品で、弁当派の多い音ノ木坂学院も毎週その日だけは購買部が戦場と化し、普通のパンを買いに来た生徒は立ち入ることすらできないらしい。ちなみに1パック1000円というオマケ付き。

有「アレを僕に買ってこいと!？」

あれはパンの亡者とも言われる高坂ですらまだ1度も食べたことがないという伝説のサンドイッチだぞ?!

友「嫌ならいいんですよ? でもあの娘達はガツカリするでしょうねえ。乙坂さんのせいで特訓が出来なくなったら。」

有「ぐっ…。」

唸る僕を見て、友利は心底嬉しそうな顔をしながら畳み掛けてくる。

友「いやあ私も残念だなあ。乙坂さんがどくどくくしてもって言うから来たのに力になることが出来ないなんて！」

有「…買ってくるよ買えばいいんだろ！」

僕が叫ぶと友利は悪魔のような笑みでニヤリと笑った。

* * *

穂「…あ、帰ってきた！おーい！ゆうくんー！」

海「お、お話は終わりましたか？」

友利と共に戻ると、真つ先に気づいた高坂と緊張しつつもこの会合の趣旨を理解している園田が話しかけてきた。

有「ああ、遅くなって——友「ごめんなさあーい！」」

すまん、と言おうとした僕のセリフを遮って入ってくる友利。……といふかなんだその甘ったるい声は。あまりの豹変ぶりに南が戸惑ったような声を出す。

こ「え、えーつと……?」

友「あ、自己紹介がまだでしたね！南さん園田さん初めまして！高坂さんは久しぶり！乙坂くんがさっき言っていました！が私は友利奈緒！向こうでは乙坂くんと一緒に生徒会をやっていました！」

穂「と、友利……さん？」

高坂の困惑しているかのような声にも全く気にかけることなくマシンガントークを続ける友利。

友「いやごめんなさいね？さつきはどーしても緊張しちゃって！なんたつて皆さんアイドルの卵なんでしょ？いやあーうちの高校にもいるんですけどねアイドル！ハローだかグッモーニンだかの ちょこーーつと有名なしいですよなんか！まあでもジエンドには及びませんけど！あ、ジエンドっていうのはポストロックバンドで——つてもちろん知ってますよね！音楽で上行こうって人たちがジエンド知らないわけないっすよね！いやーすみません！あ！いやでもこれは知らないんじゃないかなー？なんたつてファンの中でもコアでコアでコアなファン限定のとつっつっつっておきの情報ですからね！えっ？聞きたいですか？聞きたいですよね？しよーーがないなあー！」

有「友利、ちよつと待て。誰もついていけてないから。ついでにいうとお前が本気すぎてみんな引いてる。」

最終的にただジエンドの話してるだけだったじゃないか。素に戻ってるし。

友「えー？」

不満の声を漏らす友利を端に追いやつて園田達の方へと向かう。

有「とまあ、あんな奴だ。今から園田にはこいつとコミュニケーションをとる特訓を受けてもらう。」

海「あ、あんな嵐みたいな人ですか…？」

普段は嵐どころか喋らないときは何考えてるかわからないくらいなんだけどな…。

有「大丈夫だ。ああ見えて気づかい…はできなくても頭はまわるほうだから。」

海「あんまり安心できないんですけど…。」

うん。まあそれに関しては全面的に賛成だけれども。

有「と、とにかく一回話してみろよ。嵐みたいなやつ相手は慣れてるだろ？」

海「まあ慣れてますけど…不本意ながら。」

穂「?。ねえことりちゃん。なんか急に二人がこつち見てきたんだけど…。」

こ「き、気のせいじゃないかな?」

自覚なかつたんだ…。

海「…わかりました。とりあえず話してみましよう。」

本気で不思議そうに首をかしげる高坂を眺めているとあきらめたようなため息とともに了承の言が聞こえてきた。

有「そ、そうか?」

海「まあ…このままではライブは行えませんが…これも試練、です。」

こ「…うん! 頑張つてね!」

穂「海未ちゃん、フアイト！」

海「は、恥ずかしいので応援はいいです！…では、行ってきます。」

カチコチになりながら友利のほうへ向かう園田を横目で見てみると、小声で南と高坂が話しかけてくる。

穂「…で、実際大丈夫なの？自慢じゃないけど海未ちゃんって私たち以外だと知り合
いでもうまく話せなくなるよ？」

それは本当に自慢じゃないな…。

有「まあ大丈夫だろ。多分だけど。」

生まれたての小鹿のように足を震わせながら歩く園田を待つ彼女にちらりと目を向ける。

有「あいつはもともと友達も多かったしコミュニケーション能力も高い。ついでに言えばあいつは一度受けた仕事を投げける奴じゃない。」

一度生徒会で勉強会を開いた時も、九九で数学の勉強が止まっている黒羽や僕をバカだなんだとさんざん罵りながらもあいつは一度も僕らを見捨てようとはしなかった。

…まあ問題があるとすれば今のあいつは高いコミュ力の使い方を完全に誤っていることだけだ。

見ているうちに友利がこちらを向く気配がしたので目をそらすと、どこか嬉しそうにしている南と目が合った。

こ「ふーん…信頼してるんだね。あの子のこと。」

有「い、いや信頼というか…ん？」

奴の仕事に対する危険なまでのストイックさをどう説明したものかと思っているとポケットのケータイが二度震えた。どうやらメールが届いたらしい。差出人は友利奈緒。

有「…?」

この距離の相手にメール…?不審に思いながらも開いてみると相変わらず、絵文字一つ使われない簡潔な文が表示される。

『二人を連れだしてしばらく時間をつぶしていてください』

…なるほど。

有「…二人とも。」

ぼくは静かに二人の肩をたたく。振り向いた二人に無言で校舎を指さすと、二人は一瞬だけお互いに目配せをしたあと、同時にこくりとうなずいた。

穂「…それで、結局なんで教室に戻ってきたの？」

三人であの場を立ち去った後。特にやることが思いつかなかつたので教室に戻つてくると、今更のように疑問を覚えたらしい高坂が訊ねてきた。…てか、やつぱわかつてなかつたのな。

有「園田の人見知りとあがり症を治すのが目的だからな。僕たちが近くにいたら意味がないだろ。」

多少の意味はあるのだろうが、それでも周りに知人がいるという状況では効果は半減だろう。

僕が言うと、南が心配そうな声をあげる。

こ「うん…まあそうなんだろうけど…大丈夫かなあ？」

有「…。」

南の気持ちもよくわかる。もともと、僕は園田に一人でライブの宣伝でもしてもらおうと考えていたのだが（これなら人見知りだろうと話しかける必要はない。これであがり症だけでも克服してくれればとりあえずライブだけはできる）あまりの拒否ぶりに断念せざるを得なかつた。そんなやつが知り合いの知り合いといきなり一人で話せるよ

うになるとはとても思えない。

有「…ま、そつちはどーにかなるだろ。とりあえずこつちはこつちで準備しとこうぜ。まずはライブの宣伝に配るチラシから、かな。」

穂「うん。そうだね。」

あの友利のことだ、何か考えがあるんだろう。少なくとも奴が仕事としてやるという以上園田に何らかの変化を与えてくれるであろうことは間違いない。ならこつちはそれが成功した場合に備えて準備しておくべきだろう。

有「それにしても…」

南のノートに描かれたチラシの下書きを高坂と見ながら、二人に聞こえないようにつぶやく。

それにしても、園田海未と友利奈緒。

あの二人、どんな話をしてるんだらうな？